賀

特104
942

三ヶ月

吉泉

大正
13.12.15
内交

『三つの世界』を上梓しやうと思ひたつたのは、私が大正十二年の夏、大連港を振出しに四國、九州、本州から北海道の涯てまで數ヶ月の旅をつゞけた時の途上であつた。小田原の椿白雨氏を訪ひ、いよいよその決心を固くした。といふのは、この出版について一切引受けてくれたからである。その上好都合なことには椿氏の親友である垂木文立氏が印刷の方を快諾され、裝幀は彫塑家牧雅雄氏が骨を折つて製作された。かうした復とない機會を握つたものゝ、彼の關東大震災は、私の小冊子の上へも及ばないわけに行かなかつた。

しかし、今やその努力は空しくなかつた。玆に謹で三氏の勞を深謝す。

南滿洲長春にて

清島蘇水

目次

木乃伊になる……一
鹽魚……三四
三つの世界……四七
盜汗……五九
未練……七一
死の價……九九
飯……一〇三
無情を感じた話……一〇八
般若の小政……一三八
ルビーの指輪……一四五
戀も知らずに……一七一

工夫の子……一九三
死を蹴ふ心……二〇四
暁……二一一
長靴……二四五
母危篤……二五一
良心……三一六
幼きものの……三四四
懲に絡る二つの話……三六〇

目次終り

木乃伊になる

一

不斷消息だけは絶やしてゐなかつたが、病後の保養旁々ぶら〳〵旅行してゐた松川金彌は、ふつと思ひ出した樣に、横濱の舊友村瀨幸造を訪ねる氣になつた。

昨日は市にゐたのが、けふはもう此處に來たと、鳥渡文明の有難さを思つて櫻木町の停車場に降りた松川は、俥屋を呼んで日吉町の村瀨宅へ走らせた。

『且那、濱はお初めですか』

『……初てなんだが。』

『日吉町だつて廣いんですから、番地はお分りでがせうね』

俥屋は下司張つた調子で、足を少し緩めながら、振向き加減に車上の松川に尋ねた

『四百六十番地だ。』

車夫は返事もしないで、その代り勢よく走り出した。松川は調子よく運んで行く、車夫の足もとを見下しながら、村瀬のその後の生活を考へた。別れてから八年になる早いもんだ、今でも性急で女が好きか知らん、もう四十を一つか二つ越した筈だ、頬は少しこけてゐるけれど、長細い顔のでが〳〵光つた、につと金歯を見せて嫌味なく笑ふ面構へは、女からも好かれる形だつた。松川はその印象深い顔を確然と頭に浮べた。あの頃、男も三十になつてゐたのに、頑固な昔氣の母親には頭が上らないで、收入の全部は母親に一旦渡さねばならなかつた、ある曖昧屋出身の村瀬の妻君は、その矢釜しいお母さんと、十九になる妹との間に小さくなつてゐた、その細君はだらしのない所にゐたに似合はず、好きな煙草さへ止めたほど殊勝にしてゐた。村瀬はその母親と優しい、女房との間に至つて、絶えず氣をもんで、女房を勞はつた。

『僕が市に出た序に、けふはお袋と妹とが、××の弟の所へ行つてゐるから、お咲

の好きな蒲鉾を、上等な奴二本、土産に買つたと思ひたまへ、そしたらお生憎さまさ歸りの汽車でお袋と一所になつてしまつた、あんまりいま〳〵しいから、少し惜しかつたけれど、新聞紙に包んだまゝの蒲鉾を汽車の窓から投げ捨てたんだ。そしたらお袋が、幸造、今のは何かいてんだ、何、何でもない、停車場の待合で喰つた夏蜜柑の皮だと出鯨目を云つたら、お袋の變な顔つたらなかつたよ、その晩、寢話にそのことをお咲に話すと、しく〳〵泣くんだ、貴方の親切ばかりで私は辛棒してゐますつて、僕もその時一寸悲しかつた、女が無性に可愛くなつてね……。でも女つてその位で滿足するもんだからね。』

村瀬のある晩の話に『よう〳〵大變な御馳走だ』と、と彼の脊を叩いたことがあつたその細君も子供が出來ないとお袋が云ひだして、終に出してしまつた、全くあの女はいゝ女だつたので、その後、一人の子を殘して妻に逝かれて、沈んでゐた自分の兄にお古ではあるが世話したらどうだらうと、當の村瀬に持ち込んで大笑したことが思ひ

出された。でもその時は○縣廳の役人に片づいたとかで、物にならなかつた。

『且那四百六十番地なら、この界隈なんですが、先さんの御商賣はなにさんで。』

『いまは何もしてゐないが、その隣は大きな菓子屋だつて云つてたよ。』

『ぢや、つい其處です。』

車屋は下しかけた梶棒をそのまゝにして引出した。けれども大きな菓子屋は見つかつたが、それらしいしもたやには、貸屋札が斜に張つてあつた。

『村瀨さんですか、村瀨さんは先月の末に、何でも料理屋を開くのだとか云つて、小港に引越になりましたよ。』

まご〳〵してゐるのを見兼たものか、小奇麗なお神さんが、思ひもよらぬ後の方から廣がつた襟を搔き合せ乍ら斯う云つた。

『あ、そうですか。』

松川が鳥渡困つた風をして顏を曇らせると、

『小港つて、埋立地の新開地でさあ、去年から海水浴だの　何だのつて夏分は賑やかな所です、且那、ほら、あすこに岡が見えませう、あの岡のずうつと向ふでさあ此處から二里もあります、本牧行の電車になすつたら宜でせう。』

俥屋はお神さんの話を聞くと、急に輕蔑した調子で、噪り立てた。松川は且那且那ぬかして此奴嫌な車夫だな』と思ひながら、輕い旅の悲哀を感じた。行人が不審そうにして過るのも不快の一つだつた。

それから車夫に敎つた通りに日本橋の停留場から本牧行の電車に乘つて、『小港つて何處の停留場で降りるんですか』車掌に先づ第一彈を放つて叮寧な答へを得た松川は附近の乘客に眼を配りながら、持ち物のケースとバスとを兩傍に置いて腰を下した。

『これでもMに居れば、思想家だの、何だのつて、少しは一部の若いものに、ちやほやされてゐるんだが、旅に出れば矢張り赤毛布だ、ふふん。』

米國や、歐羅巴へ行つて、まご〳〵した思想家や、畫家や、軍人や、代議士や、敎

育家たちが、歸朝してから、偉さうにあちらの政治や藝術を談ずるのも居ると思へば現在の自分のお百姓の狀態に比べて、可笑しくてならなかつた。

『次は小港お降の方はありませんか、』

車掌がこつちの方へ眼を向けて云つた。松川は兩手に不樣にケースとバスケットを下げながら降りた。

知らぬ所では自分の乘つた電車さへも懷しいものゝ一つで、その後の丸電燈の上に1920と、金字で書かれた西歷の樣な番號を心に刻みつけて、電車を見送つてから附近に眼を向けると、草の茂つた空地を置いて、まだ木の香のしさうな別莊向の家やトタン屋根の店屋が見えたりして、車夫の云つた樣にいかにも新開地らしい氣分が漲なぎつてゐた。まだ九月も半を過ぎたばかりだのに、氣候の不順な今年はもう冷い風が吹いて、路傍の草は黃色く枯れかゝつて、その葉末にはバッタが留つたまゝ死んでゐたりした。

二

考へて見れば村瀨も女房運の好い男だ、次に貰つた細君も、中脊のすらつとした氣のやさしい、さして別嬪と云ふ側ではなかつたけれど奧樣々々した恰好な女だつた。それでも貰つた當座にお袋は、自分の妻に、

『家の嫁つて、丸髷がきらいなんでせう、どんなに勸めても結はないんですよ、あれで里では姉妹が島田なんかに結つたもんですからね、貴方の樣に髷に結つてちやんとしてゐたらどんなにか好いでてうにね、』

嫁の不足を云つて、却つて家內に赤い顏をさしたりした、その後國へ歸つたあとの打合は如何だつたか知らないが、その細君も永い煩いのあとで死でしまつた。

『お綾が死んでから五月たつたから、又新しいのを貰ふことにした、いや、實は貰つた、優形はもう困りたから、今度のは太つた頑丈なデブさんだ、年齡二十四歲、俺とは十八違ふ、俺も可成の艶福家さ。』

斯う云ふ手紙を彼から受取つたのは、ついこの間であつたが今度のは甚麼であらうその手紙には前のメリヤス屋もこの不景氣につれて思はしくなくなつたから中止して徒食の狀態と書添てあつた。

『奴さんも、料理屋を始める樣じやあ、よく〳〵因つたんだらう。』

あの武家の隱居の樣な四角張つたお袋のことを考へると一種の皮肉な感じがして、早くその生活の有樣に觸れて見たくなつた。

停留場から二町も來たと思ふ街角に、風替りな街燈が目についた『Mouke house. MURASE』と書いて其下には方向示した、手が書いてあるのが逸早く讀まれた。『ははあ、先生、外人相手のレストランを開いてゐるんだな。』かう思つて、指の方向に行くと、間もなく新しい二階屋の軒に、(地上のパラダイスは此處だ)といふ意味の廣告をした軒燈が目についた。表は全部、磨硝子にして內部の樣子は一切みへなかつた。

鳥渡逡巡の後、松川は入口の戸を輕くノックした。中で女の聲がしたかと思ふと、

丸ぽちやの女が、『誰方樣で』と戸を開けた。家の中はひつそりとしてゐた。

『はい、僕は松川で。』

斯う云つて名刺を渡すと、女は一寸見上てから奥へ這入つて行つた。

『いやあ、これは珍客、さ、上りたまへ』

村瀨は昔の剽輕な態度で案內しながら、さつきの女を指した。

『これが第三のマダムさ。』

村瀨は魚釣りや女を漁ることより外に道樂を知らなかつた男だつたのだが、何時の間に英語の看板を上げたり、『マダム』なんていふやうになつたりしたのかと思つたがあの看板は僕をヒイキしてゐる、ある混合兒が書いて呉れたのだと、後で說明した。かうした商賣を思ひ立つた所以も自らうなづかれた。

ひとわたり村瀨と久濶の挨拶や、細君と初對面の挨拶やらがすんでから。

『實は松川君、女が居なくてね、母もそのことで、神奈川まで昨日から出駈けてゐ

るんだ。』

『へえ、矢張こんなのでも女が入るのかなあ。』

『そのねえ、矢張り……。』

村瀬は細君と顔を見合せてにつこり笑つて言葉を繼いだ。

『そればつかりて云つて好いのさ。商館のクラークさん達が、お引からこつそりと漁りに來るのさ、』

『妙な商賣を君も始めたもんさね。』

『わは……。これも困りぬいた末だ、然し内所でね、Mに歸つてから、舊友達に村瀬は濱で姪賣屋をやつてゐると語られちやあ外聞が惡いからね。』

『何、大丈夫さ。』

松川はかう答へたものゝ、(時代は移る)と考へずには居れなかつた、あのお咲さんを罵つたお母さんお綾さんの島田を批難したお母さんが、女を探しに出かける世の中

だから、眞に奇蹟の存在を肯せずには居られなかつた。

『宅も何やつても落つかない性分だそうですからねえ。』

細君は今度こそはと云はぬばかりに村瀬の方を向き乍らが云つた。

夕景になつてからお袋は『幸造、どうも話が纏らなくつてねえ、好いのが居るには居るけれども。』と、さも疲れたらしい恰合で歸つて來た。

三

『まあ松川さん、折角のお尋ですのに、こんな穢苦しいところでお構も出來ません先の家ですとね廣くて、ゆつくりお愛想が出來るのですが、』

お袋は感慨に耽つた樣に云ひ〳〵、細君とこと〳〵夕食の仕度をしてゐた。

『遙々のお客樣ですのにほんの有合せで』

細君の音頭で食卓についた松川と村瀬とは先づ健康を祝さうと盃を捧げた。

『ねえ松川君、何程離れて生活してゐても、生きてさへゐりやかうして會へるんだ

昔のぼろも話せると云ふもんだ。』

村瀬は盃を舐める樣にして、しみじみと云つた。何時になく生活に追はれてゐると云ふさまが、明らかに見られた。

『さうだ、古い云ひ草だが、お互に惡いことも出來んのさ。』

さう答へたものゝ、何かしら氣が重くなる感じがした。かう云ふ生活自分自身にも廻り來るではなからうか、お互にMのM會社で机を並べた同僚が一度吹き募つた不景氣風に、言葉も不自由な外人を相手の商賣を思ひつくなんかは、あまりに慘な生き方であつた。生きて居る以上は如何してでも喰はなくてはならぬ。その喰はなくてはならぬ心は眞摯である、一心不亂である。自分のさうした境遇に立ち至つた時のことも考へられて妙に感傷的になつた。

『商賣を始めたつて、つい四五日前からなんですけれど。』

お袋は言葉を切つて笑ひ出した。

『先にもお話した通り女がゐないもんですからね、嫁でもゐませんと大變ですの、昨晩も二人の客がありましてね、丁度幸造も嫁も留守だつたんで、私一人で大間誤付、西洋人だからまあ、ミルクとビスケットでも出したらよからうと、差し出して大失敗ぶん〳〵怒つて行つちもうもんですもの。まあどうしやうと思ひました、彼處は駄目だなんて、開店早々惡い評判を立てられますからね、それに毛唐つて遠慮も何もありません、疊の上へどし〳〵靴穿きで上るんです、あとで親子が拭掃除ですなんぼ貧乏になつたからつて、あんまり情ないじやあありませんかね。』

お袋は云ひ終ると鳥渡しんみりした。

『お母さん、今から愚痴云つたつて駄目、まあ折角始めたからにあちつとやそつとの嫌なことは辛棒しなきや、何せ、ビール一本が一圓になるんだから、今にお母さんは別居さして上ますよ。』

『松川さんうちの幸造たら、幾つになつてま那麼暢氣なことばかり云つてゐますよ

松川は見てはならぬものを見せつけられた氣がして、どう返事していゝか分らなかつた。

その晩松川は宿屋へと云ふのを無理に止められて二階で村瀬と枕を並べて寢た。

『今のが來た時は、丁度店が淋しくなつてゐた時でね、すこしは持つて來たんだが一溜りもないさ、直に因果を含めて使つてやつたよ。』

『君も可愛想なことをするじやないか。』

『だつて脊に腹は代へられずさ、お綾は肺病で一年も寢て死ぬし、店は淋しくなるし、僕も暴けになつて使つたよ。』

『また女にかい。』

『うん、だがその女といふのも、景氣の好かつた時代の持越しさ。』

『ぢや景氣のいゝ頃は、先のお綾さんにも隨分心配をかけたんだらうな。』

『うん、すこしはね、でも奴は自分が寢てゐるもんだから、大目に見て、遇には小

使が不自由だらうと思つて、自分の寢床の下から、ぬくいほまちを僕に渡したりしたよ。』

『お綾さんはほんとうに優しい女だつたね、あの人は無言でこそ〳〵と何事もやる人だつたね。』

松川は鈴木三重吉の初期に描いた女を想像してゐた。

『だがね、あれも不斷は優しかつたが、病氣になつてから、妙に氣難くなつて困つた。食物でも八釜しくてね、鷄卵が嫌いなもんだから、僕は滋養に富んでゐると聞いて、濱中を探して、鶉の卵を尋ねあてたもんだ、それでも食事にはぶつ〳〵云つた。』

『矢張、病氣のせいだね、』

『でも僕は充分手を盡したつもりだから後悔はない。』

『君は全く細君に忠實なるは取柄だ、蒲鉾以來感心してゐる。』

『なあんだまだ、君はあれを覺へてゐるのか、』
『なに、先刻君の家を探す時、俥の上で思ひ出したんださあは……。』
下で時計が十二時を告げた。
『段々話が地味になつて來たね、もう十二時か、寢やうか。』
『うん寢やう、僕も汽車で疲れた。』
二人はくるりと寢返りを打つた、睡らうとしたが却つて興奮するばかりであつた。
村瀨は別れた女のことを思つた。松川は痩せてゐたお綾さんが更に衰へて死んで行つた狀を想像してゐた。二十分あまりも沈默が續いた後、村瀨は突然聲をかけた。
『もう眠つたかい。』
『いゝやまだ。』
『さうか、實はその女といふのは妾にしてゐたのでね、鳥渡澁皮のむけた奇麗な女さ、藝者上りで、人の女房なんだけれどね。』

『へえ、人の女房でそんなことが出來るかね。』
『出來るか、出來んか、兎も角、僕の全盛期二年間關係してゐたんさ。そのお袋と云ふのが、芝居のお熊婆式で、僕の手當は全部、母に貢いでゐたらしい、濱には甚麼のがざらにあるさ。』
『濱つて恐ろしい所だね。』
『何。これは實社會さ、君だつて小說やなんかで、通のくせにいやに聖人振るんだね』
『これは恐れ入つた。實際、僕は堅いんだ、この頃。』
『どうだか。その女で大失敗さ、引續き關係してゐたと思ひたまへ、尤も手當なんぞは、この不景氣でお流にしたが、ところで、今度のに或日跡をつけられて、終頭暴露ちやつて、亭主が奇麗に頭を下げて鳥がついた。』
『大失敗はそれだけかい、』
松川は稍、好奇心に驅られて、話を釣り出した。

『いんや、これからさ、或る日に女がかう云ふのだ、そこでは時々花をひいてたが村瀬さん二人で金儲けをしやう、あんたはあの仲間の古着屋のお婆さんを物にしないてんだ。その古着屋のお婆さんといふのは六十三になつて、てか〳〵脂切つて好きさうな奴さ、小金持で七千圓も預金があり、手には指輪を七つも穿めてゐるんだ僕も物好にうんよからう、成功したら山別けと云ふので承知した、すると女が婆にそのことを話したんだね、婆さんは最初、若い村瀬さんがそんなことを云ふのは譯があるだらうと、疑つたが、僕も慾と色とで、嫌々その二階で三四回、お附合してしまつた、いやはや、驚いた、その執拗いことは流石の僕も逃げ越しになつた。ところで婆々酒を呑むんだ、二度目だつたか知らん、酒臭い息をしながらかう云うんだ、（村瀬さん老人を嬲りものにするんじゃありませんよ、私だつてまだ女ですからとさ。（そして印臺の金の指輪をあげやうといふんだ、僕はあとで野心があるから不要と云つてやつた。奴、慾は深いのだ、その度毎に二合入の酒の這入つた燗瓶をみやげに持つて歸るのだ、それもまあ〳〵あとで金になると見逃して置いた、ところが或日に、潮時を見て、千五百圓吹かけてやつたら、婆さん、眼をむいてこそ〳〵歸つてしまつた、然し酒の這入つた燗瓶だけは忘れなかつたのは感心した。結局、酒呑ませ損、お附合のし損さ、失敗もこの位だと、愛嬌だね。』

松川は聞き終つて笑ふと云ふより、餘りの幻滅に挨拶の仕樣がなかつた、この卑賤の事實を澱みなく語る村瀬の人格が不思議に思はれた。考へて見れば八年前のこの男も矢張かうであつたらう、然し自分はその頃若かつたのだ、村瀬の斯の種の話が寧ろ歡迎されたのだ。それは今度人の親となつて何時知らず村瀬の性格と遠ざかることこなつたのだ。寧ろ村瀬の一筋な性格が自然であるかも知れぬ、自分は或時に烈しい愛慾の念と戰つたことがあつたではないか、始めて人の親となつた時、その青春の逃げ行くを悲しんだではないか、或る女事務員の誘惑に心を亂したではないか、唯、その差は理性で押へないのに過ないのだ。この際何れが正しいのかと議論は愚であらう。

人若し女を見て淫らな心を起さば、姦淫したるに同じといふ耶蘇の言葉は耻しい程自分に充て嵌つてゐる、村瀬はそれを外的に行つたばかりだ。斯く云ふものゝ自分はさう云ふ愛慾を充したいが爲に理窟を立てゝゐるのではあるまいか。

松川は斯ふ考へ及ぼすと、その本心にひつたりと觸れたやうにして、慄然とした。そしてこの友達を訪問したことも或はさうした慾望を滿したいがためではなかつたらうかと、淺ましい自分の心を疑はないでは居られなかつた。

（お前は何と云ふことだ、妻や子を離れると直にこの狀だ、お前の心は漸く眞の人生に觸れて來やうとしてゐるではないか、お前はなぜ出家とその弟子を唱仰して讀んだ、お前はなぜ一燈園の生活に憧憬した、お前はなぜニイチエの越人を學んだ。お前の內部生活は覗きからくりだ、次から次に變る、もつとしつかり、もつと掴むものを掴め。）

松川は瞬間に激しい羞耻と悔恨の情に迫られて、このシンプルな舊友を憐に思ひ且つ羨んだ。

『君は相變らずだね。』

『でも仕方がないさ、事は計劃してゐるといふ譯ではないが、總て機會がしてしまふのだ、その女だつて店の忙しい時分內職旁々手傳ひに來てゐたのだが、確かに僕の性分もあらうさ。』

『然しもう女も大概にした方がいゝね、罪だぜ、奧さんにも。』

『いやに君は堅いことばかり云ふ樣になつたね、まあ寢やう、そして明日は一日案內しやう。』

然し松川は朝になつたら、もうこの家を去らうと思つて靜かに眠りに付いた。

四

正しく生きるといふことは淋しいものだと、松川はある先輩の言葉を思ひ出した。聖者の生活とて、觀照の態度に依つては必ずしも正しいものではない、然し人々おの

〳〵の惱みを持つてゐる、その惱みから離脱しやうとするとき聖者の境地を憧れるのだ。その清き眠れる心は自我なのだ。世の所謂不善をなして自らを滿足するの自我なのだ。その二つの自我に嚴密な意味で何れだけの逕庭があらうか、道德の評價は畢竟個人の評價である然らば正しい生き方といふものが世の中にあるだらうか、自己の道德的滿足はそれが正しいのであらうか、(俺は迷ふ、俺は迷ふ)

松川は朝食をしながら、昨晩の村瀨の話を基礎にして考へてゐたが、ふと味噌汁の强い香で我に返つた。『つまらないから、朝立つてしまう。』

さう決心したものゝ久々に舊友に會つた手前、年寄の親切なとりなしの手前、寢て考へた程現實は簡單に片づけるわけにはゆかなかつた。

『どうせこんな商賣には男は禁物だから、毎日ぶら〳〵だ、懷の淋しいのがきずだけれど、さ出かけやう。』

斯う云つて村瀨は家を出た。

二三日止んでゐた雨が又けふは降り出した、二人は傘を傾けながら、思ひだしたやうに古い同僚の話なんかして三溪園の方へ足をむけた。

居留地から紀念館——公園——伊勢崎町と歩いて見たが、格別旅人の目を驚かし心をひかるゝものはなかつた。總ての點に於て彼の在住するMのT市の方が遙かに纏つて都會らしかつた。

『君は何を見せても感心しないね。』

『いやそうでもないさ。』

松川は仕方なしの返事をした。さうして自分の憂鬱は半ば村瀨に絡る或る幻影が威赫してゐるのだと思つた。

『ぢや今に好い所に連れて往つてやる。』

南吉田町から東吉田町と通つて、露路を二三度ぐる〳〵廻つたかと思ふと、二人は小じんまりした格子戸作りの家に立つた。

彼は村瀬の所謂好い所なるものを、大方豫覺してゐたのであるが一種の壓迫と弱い心とに引き据られて逡巡の中に來てしまつた。

『まあ、村瀬さん、默まつて開けるもんだから叱驚したわ、』

突然上り込んで長火鉢の傍に坐つた村瀬はもう煙管をにぎつて、女のいふことを聞きながらにや〳〵笑つてゐた。

『何か叱驚するやうな弱味でもあるのかい。』

『いやよ、この人は、冗談じやない。』

女はコケチシュな眼で村瀬を見てから、新らしい彼に眸を移した。(これが妾だつたんだな)直にさう思はれた。成程、色も白く顏も纏まつて居た。

『けふはどうしたの、』

女は立膝にしてゐたのを行儀にすはつて和かに尋ねた。

『何、この遙々とMから御入來のお客樣にお前を見せやうと思つてさ。』

『まあ口の惡るい人、こんな人と一所に歩いちや、評判が惡るくなりますわ。』

女は會釋しい〳〵松川に口を切つた。ほんとに久し振りにかうした空氣に觸れた彼は、挨拶も何も不要ない簡易な社交が珍らしく感ぜられた。

『お客樣に珍談でもないかね、濱の土產話になるやうな。』

『さうねえ、ないこともないわ、六十三と十三といふ話もあるもんですもの、』

女は一寸小首を傾けて嬌態を作つてから、ぷつと吹き出した。

『おいよせよ、人聞きが惡るい。』

『おい何だい、六十三といふのは解るが十三といふのは?。

『村瀬さん話していゝこと。』

『つまらないや、この人は六十三を話してから御機嫌が惡くなつたんだ、こんなこと云つたらすつかり愛想つかさるよ。』

松川はこの言葉にはつとしたが、無意義らしかつたので碎けた調子で口を開けた。

『どうせ序だ、ぶち蒔きたまへ、M育ちの俺には珍らしいことばかりだ、何も見學だ。』

『あんまりいゝ見學でもなからふ。』

『何、なんでもない話ですわ、たゞ、この人が、叔父さん〳〵といふ十三になる可愛い待合の子を四日かかつて何したつてえことです、それで合計七十六運がいいつて皆に羨やまれてゐるですわ。』

『おうやおや。』

松川はこの醜怪な話――といふよりはこうした情事が家常茶飯に行はれてみる所に來て道德と結びつけて考へたりした自らが愚かしかつた。同時に烈しい誘惑が襲つた（俺だつて一生に一度位、地獄の生活を味つて見たつて罪惡ではなからふ。文豪の全生涯を見よ、あの人には若い時に汚點がなかつたらうか、地獄に觸れねば眞の地獄の藝術は表現できぬではないか、貴い體驗を試みやう。）

それは明らかに安價な自己辯護だと意議しながら、心はだんだん落ちついて、彼等

欠

翌朝、松川は國府津の舊友を訪ねるべく横濱停車場に俥を走らせた。（發車間際に漸く間にあつた）と一人言を云ひ〳〵村瀬が見送りに駈けつけて來た。

『ぢや御氣嫌よう、お母さんにも、奥さんにもよろしくね。』

『丁度工合の惡るい時で、ろくな待遇もしずにすまなかつたね、さよなら、病後のからだを用心したまへ、細君にもよろしく。』

汽車が停車場を離れて、腰をおちつけると松川はお綾さんのことを考へた。

『あの男は實際幸福だ、俺は十年も連れそうてゐる妻から未だ何物をも所有しないんだ、俺の焦躁、懊惱、その求めてゐるものは、信仰でもなかつた、その愛、異性の眞純な愛であつたのだ——。』

——（完）——

—（一九二二、二、一日稿作）—

欠

壚魚

いま襟をとじつけるともう出來上るとお加代は縫ふ手を止めてほつと、こゝろもち脊伸びした。何事もやり放しな夫の定男が居るときは、何とはなしに家の中が散らかつてゐるけれど、斯うやつて、自分ひとりで氣の向くまゝに綺麗にかたづけて、針仕事を續けてゐると何の憂も起らなかつた。伸び〳〵した氣分で仕事が進んだ。一ぷく小さな煙管で刻を吸つては、一氣に針を進めるのが、お加代の癖だつた。火鉢の灰は何時も綺麗に目が立てられて、銅壺の中ではちん〳〵と湯が鳴り、五徳の隙から赤い火が少し見へるのが心地よかつた。

お加代は定男が寒がりながら、勤務から歸つて來る時刻なので、お夕飯の仕度をせねばならぬと、前掛の絲屑を拂つて、窓に立ちながら外の面を眺めた。嚴しい寒氣の

爲めに、物と云ふ物は凍つて、家までも凍るかと思はれた。宿舍の家々から突出た赤煉瓦の煙突や、ひよろ長い鐵製の煙突から、いま焚べたかと思はれる黑いけぶりや、燃へ切つた白い蒸氣の樣な煙が立上つた。人と云ふ人は裝も風も構はぬといふ具合に化物の樣な恰好をしてい歩いた。これらの物淋しい滿州の冬の片田舍の光景を窓越しに眺めてゐると、今まで緊張して樂しく仕事をした氣分も、何處へやら行つてものかなしい思ひがしん〳〵と湧いて來た。夫と連れ添つて十幾年、未だに子供の出來ないといふのが何時も淋し物思ひの一つだつたけれど、けふは斯して靜止と立つてゐると過ぎ來し方の色々な出來事が繪卷物のやうに浮んで來た。放縱な夫に仕へてやつと不自由なくどうやら糊して行けて、いさゝかながら貯金さへある迄に漕ぎ付けた今迄の自分の苦勞——が涙ぐましい迄に思はれた。小さな飲み屋で醉ひ倒れてゐる夫を耻しい女の身で迎へに行たつた事もあつた。子がゐないから淋しいと謂つては、お加代の知らぬ間に女を拵へて、女の惡い親の爲めに澤山な手切金を取られたこともあつた。

まあーどうして那麼であらう、××で××屬をしてゐた頃主任の若い女中に手を付けてその爲に誠られて一時食ふにさへ困つた。その時質屋通ひさへ覺へた。また或時は一時預つて家に置いた女と出來合つて、自分は子供がないとといふ弱身があるばかりに、女の情を、炎ゆる樣な嫉妬をさへ壓さへて心勞に衰へる自分の顏や腕を眺めながら夫の亂行を默過した事もあつた。自分と夫との十幾年の長い生活は全然情事の鬪爭だつた。そしてその間に於ける貧の口論とのそれも自分に子がないからだと思へば夫に氣の毒で大概のことは認容して來た。然しこの近年は年齡の關係か思ひ諦めたのか中年に却つて多い筈の女に關した心配ごとなどは更になくなつた。現在の低い巡査といふものに甘んじて、自分に惡い顏一つもせずに、孜々と務めて呉れて、凝ると謂へば夏に釣に行くのと菊造りに一心になるやうなものだ。そして自分の日頃の望みさへ『諾々』と聞て呉れる優しい夫となつた。

勝氣なお加代は自分の苦しかつた若い頃を考へると全く、今迄に成し遂げて、芽出

度く晁をつけた心勞に對してやれ〳〵と思はないではおられなかつた。そう思へば今縫つてゐる大島紬の通しなどは、お加代の苦い過去の作り上げた、ただ一つの寶のやうなものだ。お加代は小娘の頃流行につれて踊を稽古した。そのお師匠さんは何時もきちんとした裝で、米澤の通しか何かに焦げ、茶色の朱子の帶をしてゐた。そしてその帶から羽二重か何かの煙草入に挾んで、小さい銀の煙管を取出して白い纖弱な手で器用に色のよい刻をつめて旨さうに吸つた。幼いお加代も自分も大きくなつたらあんな恰好してあゝいふ風に煙草を吸つて見たいと思つた。斯うした先入意志は勝氣なお加代を遂に潔癖に導いた。そしてあゝいふ風にしたいと思つたのは年取つた今も忘れず夫の定男にねだつて本物の大島紬の上下を五十圓もかけて拵へたのだつた。

二十年の望み——さういへば大變に大袈裟のやうだけれど、全くそんなものだつた。そしてこの大島紬を作るためにさんざ物質上に精神上に苦しめられながら夫と暮して來たやうなものだつた。その苦勞の賜物たる大島紬は襟をつければ出來上るまでにな

つた。この衣裳を着て大連に行けることを思へば、何だか嫁入仕度の衣裳を拵へたかのやうなうす淡い恥ぢらいも起るのであつた。そして自分の苦勞ばかりを考へずにまた、夫の辛勞も思はねばならなかつた。五十圓といふ大金の衣裳には夫の勤務の辛勞と、肉體の消耗とがあつた。嘗て町へ買物に往くとき、ふと×××と書いた看板の下つた黑い煉瓦の圍ひの中で、好い加減な年齡に達した髭武者たちが、蛇腹の筋を二本卷いた帽子を頂いて銃を擔ぎながらい若い金筋の警部の號令に、步調を揃へてゐるのを見た時、よくもあの放縱な夫があんな嫌なことに我慢して素直にしてゐるかと思へばその心根をおし度つて涙ぐまないではゐられなかつた。

『うう。値を出せば矢張り立派なものだね。それを着て大連へ行くのかい。』

『ええ。』

こうした會話を針仕事の合に夫としたのは昨日のことだつた。二人のこの會話の中には今の不自由のない暮しと昔の慘な生活とが對照してゐた。

お加代は夕餐の仕度を終へてから淸々しい氣分で夫の歸りを待つた。近頃あまりやらなくなつたにもかゝはらず特にお惣菜に氣をつけて、酒をさへ一本つけた。夫もにこ〳〵と其の厚意を享けた。樂しい晩餐の後、お加代は年甲斐もないことだと嬉しい氣を抑へて、出來上つた上下の着物を紺の風呂敷の中から取り出して、寢敷の仕方をまで說明した。定男は妻の喜を見て惡い氣も越らなかつた。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

ことしの寒氣でも、流石に浪速町は賑つてゐた。歲末の店は景氣よく裝飾せられてしこたま轉りこんだ賞與金を絞り取らなければおかないといふ風だつた。お加代は知邊の妻君と二年ぶりに大連の街を步いた。知らぬ間に大分と變つた有樣になつてゐる所があつた。一昨年の暮に新調したコートと新しい紬の衣裳に身を包んだお加代は稍時代後れの肩掛をして絕へず襟を氣にしながら、ゆつたりした氣分で裝飾窓を覗き廻つた。格別ほしいと思ふものもなかつたけれど、それでも夫のものや、自分のもので

メリンスの風呂敷は可なりな嵩と重量とを示した。

お加代は二晩友達たるK妻君の家に過ごした、一晩を活動寫眞に、一晩を買物に、久し振りに會つた二人はいろ〳〵と長い間に於ける過去を語つた。その中には世帶じみた話や、苦勞した話や、流行物の話もあつた。お加代はKさんが『あんたはまあ、子供こそないけれど仕合せね、大島紬の通しなんか着込んで、ほんとに裕福さうよ。』と謂はれた詞をちよい〳〵思ひ出して微笑んだ。四人の子に取卷かれてゐるKさんはほんとうに氣の毒なほど慘な裝をしてゐた。

大連行は豫定以上の樂しさを以て成された。雜貨や新年の野菜の買物などで張り切れるやうになつた信玄袋を、赤帽に指示して腰掛の下に入れたり、または風呂敷包を棚に上げたりした。

『まあ奥さん遠い所を寒いに送つて臭れなくてもよかつたわ、せわしい師走の體を遊ばしたりしてさ。』

『遠來のお客樣ぢやないか、これ位のお勤めはあたりまへよ、また春になつてゆつくりやつておいでよ、ほんとに久し振なのに相僧がなかつたわね。』

お加代は座席に落ちつくとKさんと這麼話をした。Kさんは五分の鈴の少し前に客車が、あまり混むので『では御氣嫌よう。三村さんによろしく。』と言葉を殘して歸つた。お加代は汽車に弱いのでなるべく場所を廣くとつて發車したら寢やうと思つたけれど、奥地から正月物の仕入の客が多いので、窓際に小さくならねばならなかつた。晝から吹き出した寒い風はいよ〳〵烈しくなつて、汽車の外窓は白く凍つてしまつた。然し客室は人の溫氣とスチームの爲めに氣分の重くなるほど暖かであつた。後先を見廻はすと人々の顏は皆輝いて、棚には一ぱい夫々の品物が載せてあつた。色々の風呂敷の模樣や、蜜柑、林檎などの水物が面白い配合をして賑やかに見えた。そして客室の眞鍮の金具はきら〳〵と電燈に輝いてゐた、お加代の前にはどつかの勤め人らしい夫婦と自分の隣りに其の子供一人が座つた。春合せには土木の××らしい人と測量工

夫らしい人達が乘つてゐた。土木の××達は出張先で越年することをさんざ零してゐた。汽車が動き出した。臭水子を越ゆると××達は酒を呑み始めた。

『如何です木部さん、一ぱい』

『いや冷酒は御免だ。ウキスキーならえゝけど』

木部といふ人は應揚に手を振つてゐるらしかつた。工夫達は『はー』と生返事をして直に販賣人からポケツトウキスキーを買つて木部の氣嫌を取つてゐた。お加代は寢るにも眠れず、興味のない話ながら賑やかな男達の話に耳を傾けて居た。出張の不平から女の話となり、仕事の話となつた。

『時に木部さん。今度の軌道は狹いのでせうか。』工夫の一人が盃を手にしながら斯う謂つた。

『うん、內地の鐵道位のだらう。だがお前その話は絕對秘密になつてるから、這麼ところじゃ話せないよ。』

『あゝさやうでございますかね。』

木部の尊大振つた物の言ひ方や動作は小憎らしいほどであつた。何でも貌子寓から金州あたりへ通ずる鐵道の話らしかつた。工夫達は話の間にも隙かさず三人で代りばんこに車內賣子から蜜柑だの鑵詰だのを買つた。お加代は長い間惡い因習に滿された××仲間の生活に馴れてゐたので、かうした工夫達の心盡しや、木部といふ男の心持などは直に了解することが出來た。

汽車が金州に着くすこし前であつた。お加代の前に腰かけてゐた奧樣が突然かう謂つた。

『あゝ、奧さんお召物が汚れは致しませんか、何か上から雫が落ちるやうでございますよ。』

『えゝ』

お加代は吃驚して肩のところを撫でゝ見ると冷たく濡れてゐた。仰向いて棚を見る

と土木の人達の荷物の内なる新聞包から大きな鹽魚が尻尾を出して、それから雫がぽたり〳〵と落ちてゐた。勝氣なお加代は「しまつた」と思つたけれど大勢の中で騒ぐのも見つともないので、靜かに懷中からハンカチを出して拭いた。雫は下の裕までに通つてゐた。

『大變に濡れましたね。も少し私が早く氣が付くとようございましたにね。』

『いゝえ、私の不注意で……。』

お加代は着物の事を考えると泣きだしたくなるほど腹立たしかつた。それでも凝つと我慢して今にあの人達が氣が付くであらうと思つてゐた。けれども調子づいた男達はから〳〵と笑ひ壞れてゐた。お加代はすまし込んでゐる木部や自分の心も知らない男達が恨めしかつた。甚麼に抑へていても、もう言はずにはゐられなかつた。

『濟みませんが、あの魚をどつかへ移して下さいませんか、這麼にしずくが落ちますので。』

お加代は濡れた場所を示しながら工夫の一人に注意した。男は『すみません』とべコ〳〵頭を下げて其の不都合を詫びた。それでも木部は知らない風をしてゐた。何て冷酷漢だらう、お加代は摑みかゝりたいほど憤りを感じた。工夫達は又何で邦麼男に機嫌を取らねばならないのだらうか。

折角の樂しかつた大連行も、長い間樂しみにして拵えたこの衣裳も滅茶々々に成つた氣がした。そしてかうした不愉快はあの木部といふ男ひとりの仕業のやうに思はれた。

汽車が××へ着いた。お加代は此處で下りねばならなかつた。夫が迎へに來て呉れることになつてゐたけれども、何か都合があつたと見えて、宿舍の支那人が迎へに來てゐた。お加代は宿舍に歸る道すがら着物の滲を拔くことばかりを考へながら歩いてゐた。

●●●

にいやに鍵を開させると室が暖めてあると見えて、ぽか〳〵と暖氣が顏を襲つた。

ばつと電燈をつけると、買物も何も抛り放して着物を拔いた。しみのところは少しく思ひ通りに變色してゐた。

『まあ、〳〵。』

お加代は思はずひとり言を云つた。押入れから揮發油を取り出して拭いて見ると少しは落ちたけれど、臭氣さへよく取れなかつた。『ほんとに何うしたらいゝのだらう』泣きたい思ひをして、水洗をしやうと炊事場の板の間に來ると、この間＋＋から歲暮に貰つた鹽鰤に頭をぶちつけた。お加代は腹立ちまぎれに、力一ぱいげんこでつるしてあつた鹽鰤を叩いた。鰤は大きな音して炊事の土間に落ちた。

どうしたのか夫の定男はその晩歸つて來なかつた。

（完）

三つの世界

過　失

大連から八十九哩の地點關子といふところに保線宿舍がある。この附近は海拔四百尺以上もあつて、南滿鐵道中の最高地點とも謂はれ、從つてこの地方の分水嶺となり氣候も附近の山脈で兩分せられてゐる。そこから溫泉で名高い熊岳城までは殆んど下り勾配となつてゐる。萬家嶺の驛はその勾配を恰も傍目も見ずに飛んで行く列車を喰ひ止めるかのやうに出來てゐる給水驛である。汽車はこの驛で水を呑んだり、油を差したりする。特に上りの列車は甚い勾配となるので、充分の手當をすることになつてゐる。

それは或冬のことであつた。奥の方から來た貨物列車は激しい吹雪のために、大き

な貨車番號さへ見えないやうに白く凍つて、屋根板からは短い氷柱が幾筋となく下つてゐた。

丁度ぞろ〳〵となめくじのやうに、喘へぎ〳〵列車は萬家嶺の驛に這入つた。機關車はその噴出する蒸氣のため眞白に各部が凍つてゐた。火夫は油を差して廻り、機關手はメイン、ピンをハンマーで叩き、給水夫はその隙に石炭を掻き集めたりした。それらは甚い上り勾配に對する戰鬪準備であつた。

風は列車の後を押すやうにして、粉のやうな雪を交えながら矢張り激しく吹いてゐた。鐵道は萬家嶺の驛から廣い砂川に添ふてゐるので、丁度關子とこの萬家の驛との間にその川を横ぎる高い橋梁があつて、加ふるに其處は激しいカーブとなつてゐた。萬家の驛まで無事に來た列車は屢々此處で後戻りをすることがあつた。それは重に勾配とカーブとが列車の進行力を殺ぐからであつた。その日は生憎と人間の氣力の一番衰へた黎明前と、橋が北風を眞にうける位置にあるのとで猛り狂つた吹雪は、容赦もなく唸りながら列車の横腹を吹きまくつた。機關手はこの難所をどうか無事にと念じながら懸命に努力した。けれども列車は自然の大なる抵抗にはどうすることも出來なかつた。數回大きな空轉の音を立てゝ、黑煙を凄まじくはきながら動かなくなつた。二三回後戻りをして上つて見たが、皆徒勞であつた。機關手は此の間絶えず火夫に向つてよく火を焚いてくれと勵げました。けれどもその全力も何等の効果も現はさなかつた。氣の短い上方者の機關手のHは焦れ出して、火夫のSに怒鳴つた。『お前があんじよ、火ィ焚かんからやないか、も少し氣ィきかさんと、どむ骨が折れてならへん。』Sは熱心にやつてゐるのにも係らず、Hが自分の腕の鈍いのは棚に上げて叱りつけるのが癪にさはつた。

『僕にはこの上よくやれません。』

Sは腹が立つたけれどこの上は謂はなかつた。

『何にッ！　やれん、やれん事があるかい、阿呆やなあ、も一遍やりなほして見

るさかいに、あんじよ焚いて見イ。』

火夫はぶつ〳〵零しながら働いた。どうしたのか、今度は無事にぢり〳〵と動いだ。機關手も火夫も無言のまゝ心の中でほつとした。そしてその暫くは厄介な事故から逃れたことが二人には嬉しかつた。然しその喜悅は束の間であつた。今度こそ列車は全くどうする事も出來ない事故が起つた。それは鳥渡した機みに、ほんの瞬間の出來事で火夫がその職用の石炭ショベルを汽罐の火室へ投込んでしまつたからであつた。

この瞬間・機關手もアッと蒼くなつた。火夫もアッと靑くなつた。然し何とも手の付けやうがなかつた。小さいショベルは長大な列車を止めてしまつた。そして機關手と火夫は暫く睨みあつてゐたが、軈て火夫は『申譯がございません。』と詫び入つた。機關手のHは今にも掴みかゝりさうな權幕で怒鳴つた。

『お前はさつき矢釜しく謂つたんで、俺を困らそと思つてやつたんやな。』

『いえ、け決してそんことはありません全く過失です。』

『うんや、そやない、屹度さつきの敵打ちや。』

『それやHさんの邪推です、誰が求めて事故を作るです、僕は漸と上つたのが嬉しくて、それを思つてゐたので、うつかりしたのかも知れません。』

『嘘や、〳〵、莫迦な、誰にきかしたかつてそんなこと信用するもんか、何と謂ふたかてあかん、俺は俺だけの手續するんやで。』

Hは恰も何事かを宣告するかのやうに嚴かにいつた。Sは種々辨解して見たかつたが駄目だと思つたので『ご隨意に』と默つてしまつた。

斯くて長い間立往生した列車は、外の救援機關車にひかれて南の方へ去つた。

Hは其の翌朝、事務所に出ると、主任や、同僚の誰彼に、自分の所信を大袈裟に吹聽した。自分の關係でない事には、たゞ面白い話題にしてしまふ、總ての人達はHの云ふことに賛成した。弱い位置に立つたSはせめて主任は自分を信じて呉れやうと、其の過失であることを訴えたけれど、哀しやその主任さへ認めて呉れなかつた。

それからSはそのために嚴しい手續書を取られた。一週間すると重い罰報が來た。Hは長い間、この出來事を得意氣に、事務所や乘務先で喋舌り廻つた。過失！それはSの胸に秘めた、誰一人知らない、大きな苦しい塊りであつた。

△三人の男

五十歳の男と、三十歳の男と、二十歳の男とがゐた。三人は御互に心易い仲であつた。

五十歳の男は世の中の總てを舐め盡してゐた。勿論酒も女も煙草も。彼は四十を越えて來ると人生の淋しさを感じてきた。四十八歳の時に彼は友達の牧師から勸められてバプテスマを享けた。丁度その時彼は精神的缺陷を何者かに依つて埋めやうと思つてゐた時であつた。で彼は基督に救はれて非常に幸福であると喜んでゐた。消耗しつくした魂には全くそれは大なる光明であつた。

三十歳の男は社會に立つた彼の位置として已むを得ず放縱な生活をしなければならなかつた、そしてその必然たる結果としては多大な負債に苦しんでゐた。彼は何等かの方法に依つてこの窮境を遁れなければならないと思つた。五十歳の男はこれを見かねて神を信せよと彼の手を引いた。彼は無言のまゝ聖い洗禮を享けた。

この時から彼の周圍の人達は彼に寄りつかなかつた。

彼は幸福だと云つてゐた。然し彼の內心のどこかにその幸福に物足らなさを感じてゐた。

二十歳の男は無垢の青年であつた。五十歳の男と三十歳の男とは青年が邪道に這入ることを恐れて、否應なしに洗禮を享けさした。そしてかういつて青年を讃美した。

『私達は若い時に酒を呑んだり、女をだましたりした罪に依つて、甚い責苦を神から享けましたが、今は懺悔して、神樣に救はれたので、氣が清々してゐます。貴方はまだ何の罪も犯さない若者ですから、罪深い私等より、どれだけ神樣は深く愛して下さるか分りません、貴方は天國では、吃度、神の近くに行く事が出來ますよ。何

と幸福なことでしやう。』と。

△幸　福

公爵アレクセイ、ミハイロウヰッチ、マースレコフは久しく懸想してゐた、コルチャギン家のミーチャと結婚が成立したので嬉しくて溜まらない。今丁度ペテルグラードからモスクバの方へ花嫁と密月旅行の途についた

汽車の窓から外を見ると、青々と一寸ばかり伸びた麥は、暖かい太陽の光りをうけてゐることを感謝してゐるかのやうに見えた。

彼は絶えず嬉しさに滿ちて、寧ろ有頂天になるほどそは〳〵にこ〳〵としてゐた。可愛いミーチャの顏を見てから外へ眼をやると、眼に觸れるもの丶總てが、お祝ひを述べるやうに見へた。

『アレクセイ御めでたう。』

客車の窓のカーテンも、その模樣も、一隅にブス〳〵沸いてゐるサモワールも、そ

の湯氣も、特に彼の指に燦としたリングは『アレクセイ御芽出度う』を連發してゐた彼は全くどうして、那麼に嫌がつてゐた者が、這麼に早く樂しい結果をもたらしたかを思はないではゐられなかつた。彼はミーチャに伯爵アダレード、ペーテルと云ふ貧棒な情夫のあることも、その男がつぎの箱に乘り込んでゐることも、この男をミーチャに依てモスクバで自分に紹介せらるゝことも全く知らなかつた。

列車がS――停車場に著いた。暫くして鈴が鳴つたので三度目の鈴まではよほど停止時間があるので公爵はこれ見よがしにプラットホームをミーチャと手を組みながら散歩した。彼はミーチャが客車の窓から顏を出してゐるペーテルと眼で話してゐることも、ミーチャが彼の女の情夫のことを思つてゐることも知らなかつた。

折からそこへ改札口から大きな風呂敷包を抱へた黑いペチコートを引きずるやうにして來る百姓の年增女があつた。彼はふとその女に眼を止めた。女も『まあアレクセイ――樣御氣嫌好う。』と彼夫婦の傍に來た。で彼は鳥渡、ほんの鳥渡逡巡したが、

直ちに勢よく手を女の前に差出した。

『達者だつたかい。ブブノーワ。』

女は以前彼の家の下婢であつたが、不都合のために解雇したのであつた。ブブノーワはそれを見て喋舌出した。

『まあ旦那樣私ほど不幸な者はございません、お家でお暇を頂いてから、飲んだくれと夫婦になつて、苦勞といふ苦勞を仕拔きました、その揚句がどうでございませう其の亭主も、旦那樣去年逝なくなりました。たつたひとりの先の亭主の仲へ出來た娘もRの町で奉公してゐますが、百留の爲めに、黄盤札を受けねばならぬから助けに來て呉れと、手紙を寄越しました。今この汽車で行くところでございます。しかしその百留のお金など、私に何で持ち合せがございませうか、僅か百留で娘の――。』こゝまで喋舌つて來るとずるそうに彼の顏からミーチャの顏へ眼を移して又其の先を續けやうとしたが生憎と二番目の鈴が鳴つたので、ちよつとの間話が途切れた。

『まあ可愛想に……』

ミーチャが仕方なしに謂つたが、アレクセイは丁度あなた元の召使ではありませんか何とかしておやりなさいと聞えたので、急いでポケットから百留を掴み出してブブノーワに渡した。ブブノーワは以外な幸福に眼をしばたいた。けれどもそれはほんとであつた。

『私の――神さまのやうなアレクセイ――。』

彼の女は感謝のお世辭を並べながら大事そうに黑いペチコートの奥へ仕舞ひ込む時、第三の鈴が鳴つた。

アレクセイは全くブブノーワが嘘八百を双べてゐることを知らなかつた。そして彼の女が嫁に行つてゐる娘のところへ農事の加勢に行くのであることは勿論知らなかつた。

彼は汽車の中で善根は善い實を結ぶことをミーチャに囁いた。そしてモスクバのホ

テルで精一杯に可愛いミーチャを抱擁してやることが出來ることに考へが到ると、全く叫び出したくなるほどの嬉しさを感じた。

『あゝ、もうそこに最上の幸福が招いてゐる。』

彼はの心の喜悅の外は何も知らない。

――大正六年二月七日夜作――

盜汗

一

俊雄の掛りつけの町の醫者S氏が

『何、心配することはありません、こうつと、明日が日曜次が祭日ですね、その中には直りますよ。』

と至極手輕く診察して往つたので、何程かの安けさを覺へて、一日二日と日が立つたけれども午後の二時頃から起つて來る壓な惡寒に續く發熱は何時に變らなかつた。

『貴郎、店も忙しいんですから、何ならT病院に診て項いては如何で御座いますか。』

妻の繼子は或夕に襷を外しながら氣遣はしさうに俊雄にかう云つた。

『ううん、さうせうかな。』

俊雄はせうことなしのやうに返事したが、內々怪しげな熱の出方に或恐怖を感じて

ゐた。

それに妻の繼子が云ふやうに店も決算期で二十人足らずの人達が天手古舞をしてゐることを考へると全く安閑と寢てゐる氣がしなかつた。『株式會社CM商會』それが明らかに二十幾人の店員によつて經營持續せられてゐることが分るやうで、自分一人の休業はまた確かに會社に多大の損耗をかけてゐると云ふ責任感を起さないでは居られなかつた。

「早く起上つて働かなきや、人間には矢張り仕事が藥だ、仕事さへしてゐりや、宗教も道德もあつたもんじやない、不斷に仕事が五月蠅い時は一週間位ぶつ續けに寢たいなあ、なんて思つたが、寢て見れば仕事が懷かしい。帳場立が見える、書類が見える算盤が見える。」

俊雄は天井を凝視してゐると全く、書類が見え、算盤が見えた。「明日は是非T病院に行かう」俊雄はつぶやくやうにして横を向いた。すると、計らずも本箱の一隅に光

つてゐた金字の「ジャン、クリストフ」と云ふ文字が目に入つた、彼は稍頭が疲れたやうに感じられたので、努めてそうした難かしい人生問題から遠ざからうと又反對の方へ寢返りを打つた。と、また胴腹のあたりでするかおかしな濁音を確然と耳に止めた。

『こりあおかしい、屹度内臓に故障があるな。』

習朝逡巡してゐる中に十時過となつたので、繼子に車を呼ばせてから、玄關に出た四五日寢てゐる中に世が全然春になつてゐるやうな氣がした。こゝの三月の末と云つてはまだ木の芽とて吹かないが氣をつけて見れば梢々がほのかに青んでゐるやうに見えた。そして何よりもぽか〳〵と麗かな日が照つてゐるのが嬉しかつた。俊雄は無關心になつてほろ俥に乘つた。ほろの隙からなま暖い風が這入つて熱味のある膚に觸れるのが氣持よかつた。

軈て俊雄は得體の知れない患者達の大勢集つてゐる中に薄氣味惡い感じをしながら

大人しく椅子に掛けてゐた。

『内科ばかりに、こんな澤山な初診者があるのか。』

俊雄は折々周圍を見廻はさないではゐられなかつた。青い不安な顏した人や、熱のためにぶるぶるしてゐる人などもあつた。之等の病者の不潔な空氣を換へるのであらう、白く塗られた低い天井では、二つのベンチレターが絶えずキーキー音を立てゝ廻つてゐた。』期せずして皆な死を怖れてゐるんだ。だがそう云ふ俺も……もうそんなことは考へまい。』俊雄は靜かに眼を瞑つた。さうしてこの間の不吉な豫感に心を脅かされてゐた。少し遲れて來たので俊雄には中々順番が廻つて來なかつた。檢尿が濟んでから永いことしてやつと『野崎さん』と呼ぶ看護婦の聲がした。俊雄は痺を切らしてよろ〳〵として診察室の方へ歩いた。

太つた福相な主任醫師は聞いてゝ氣持のよい程の音を立てゝ打診を試みた後

『こりや流感から來た肋膜ですな。』

斯う錆びた聲で俊雄に云つてから助手に何かを命じた。俊雄は肋膜と聞いて落膽したが、それでも醫師の誤診ではないかと賴りない望みを抱いて助手の前の椅子に腰をかけた。

『其の患者はPleuritis exsudativu ですね、患部は青いチョークで印をつけておいたからProbe（肋膜穿刺）をやつて見て下さい。』

主任醫師は稍衒學的にかう助手に云つてから殆んど機械を扱ふやうに次の患者を見てゐた。俊雄は脊部に扶ぐられるやうな疼痛を感じた時には肋膜穿刺が助手の手に依つて突き刺されたのであつた。ビリ〳〵けいれん的な疼痛が終ると助手は主任醫師にも見そるやうにして、窓の明りに穿刺に溜つてゐる Probe puktion を透して見てゐた。

『水が餘程溜つてゐますよ、えれに熱がありますから、御入院なさい。』

牛ば命令的に主任醫師は云つた。俊雄は喪心したやうになつて、輕く肯いた、

『どうぞ宜敷くお賴み致します。』と答へた。

俊雄は夢遊病者のやうににふら〳〵して控室の長椅子に横になつて二重廻しを被ると、何時來てゐたのか繼子が心配そうな顔をして傍に寄つて來た。

『あなた、如何なすつて』

『うん、肋膜で水があるんだ、入院することにした。病室が極つたら御苦勞だが、何や彼や持つて來てお呉れよ。』

斯う云つて二重廻しを更に深く被つた。『遂にあの不吉な豫感が實現されて來たんだ俺は斯うなると云ふことが全然水彩畫でも見るやうに明瞭に、俺の頭に有つたんだ。俺には時々自分の將來の運命を豫知することが出來た。善いことは樂しみとしてその豫感の實現を待つた、不吉なことになるとその實現を怖れて努めてその豫感から逃れやうとした。そこに人間の弱さが認められた。つまり俺は矢張り、唯の人間だと思つた。將來に對する豫感——自分の運命を知る力が籠つてゐると思ふと、ミケロ、アンゼロの運命の糸を紡いだり切らんとする三人の女を描いた名畫が、そのまゝ宿つてゐるやうに思はれてならない、今度だつてさうだ。家に寢てゐる時から今にも直りそうで、その實、ずる〳〵に長くなる豫感があつた。あの事は思ひ出してもぞつとする會社の小使がこの間二ヶ月あまり入院の後、衰弱のため枯木の倒れるやうに死んだ。一つは老年と云ふものが因をしてゐるかも知れないが、彼の男は朝から事務室や廊下の掃除を仕舞ふと、何時でもがつかりした恰合でペチカの傍に椅子を引寄せて、殆ど無意識な風で煙草を吸つてゐた。彼の男は一體何を思つてゐるんだらふ。ぼか〳〵と日があたつてゐる窓に向つて靜かにゐたんだ。時々ゼレ〳〵と咳が出た、さうして病氣は結核だと後で知れた。支配人の澤田は小使の病氣が惡るものだと知ると、衛生屋を雇つて來てフォルマリン消毒をやつた、會社の仕事を半日休んだので若い事務員たちは皺入かのやうに喜んだ。

午後に氣味の惡い寒さを感ずるやうになつてから二日目だつた。俊雄は忙しい仕事の隙をぬすんで、席を離れて何氣なしに煙草を吸つてゐた、丁度體は例の惡寒が襲つて

來て、何とも知れぬ寂しさが身うちを廻つてゐた、窓には早春の日がぽか〳〵と暖く照つてゐた。ふいと氣がついて見ると全く慄然として肌に粟立つのを覺えた。どうだらうふそれはあの死んだ小使が毎時もやつてたそつくりのことをしてゐたんだ。無心な恰合でぽか〳〵と日が當つてゐる硝子窓を透してうす青い空を眺めてゐたんだ。さうしてあの小使のやうに俺も長い病氣に取つくんじやあないんだらうかといふ豫感が、むら〳〵と體の何處かで頭をもち上げた。さてその不吉な豫感は現實となつた。全くの暗合かも知れない、でも俺には恐しいことだ。

『野崎さん、病室の準備が出來ました、どうぞ此方へ、御案内しますから。』

若い看護婦は斯う云つて横になつてゐる野崎に聲をかけた。

『思ひがけない災難みたいなもんだね。』

俊雄は自分の後からついて來る繼子にそう云つてあの不吉な考へを反らさうとした

二

『あゝ、俺もすつかり病人になり切つた。こればかりで息を切らすやうじや。』

診察室から病室までは一丁ほどしかなかつたけれど熱のある俊雄には可なりな苦痛だつた。N號病棟二〇號室それが彼の病室だつた。俊雄は看護婦から『此處です』と敎へられて病室へ這入ると驚いた、大きな廣間で何のことはない、兵營か寄宿舍かなんぞのやうに寢臺が向き合つて十四も並んでゐた。俊雄が指定の寢臺にごろりと横になると、妻の繼子は耳元に來て囁いた。

『あなた、二等になさつちや如何？』

『ううん、そうだね。』

俊雄は生返事をしながら考へた。彼の女の心持はよく分つた。彼の知友に對してや又彼自身の自尊心を傷けないやうに併せて、彼の女のプライドをも滿足したかつたのだつた。だが俊雄は肋膜はどうせ長い、それに妻に内所の茶屋の拂いなんかもあることなんだから、これで澤山だと思つた。

『おい、肋膜は長いからね、三等で我慢しやうさ、それに仲間が大ぜいだから却つて賑かでよいだらうよ。』

『そうですか、御辛棒して下さいますか……。』

繼子はやさしくそう云つて、眉を曇らせながら周圍を見廻した

『じや、お前御苦勞だが、何や彼や持つて來てお呉れ。』

俊雄は繼子が歸つた後で、寢臺の上で白いものに包まれながら、これですつかり病人だと何程かの安けさを覺ゆると共に、見馴れぬ人達の中に身を横へた一種の不快をも思はないではゐられなかつた。寢臺上の五尺の肉體！その精神を除くの外は醫師と看護婦に投出してしまつた。

倦怠と焦燥との日が、一日、三日、十日と過ぎて行つた。俊雄はいまはもう本統に仕事が戀しがつた。同時に快活な青年達と煙草を吹かしながら會社の應接間で、有りたけの馬鹿話をさらけ出して愉快な晝の時間を過ごすことが思ひ起された。或日のこ

と

『どうだい若い衆、僕はこの二三日深夜に夢中で、左の胸倉をチクリ〳〵刺されるやうな疼さを感ずるが、それが眼を覺すとピタリと止まるんだ、ほんとに可笑しい、まさか一件でW、Wが呪ふのじやあるまいね、あは……。』

口輕な俊雄はワイルドでも物にしさうな美貌の前島の肩を叩いて斯う云つた。前島は綺麗に分けた髪の毛を撫で上げながら答へた。

『分りませんよ野崎さん、心理學者のF博士は云つてるじやありませんか、人が人を呪ふと云ふことは確かに出來るつて、あの蛇のやうな執念深い女のことですからね。』

『いや大變な難しい問題になつて來たね。』

俊雄は吸ひかけた朝日を口にしながら、他の人達を見まわした。その概畧を知つてゐる皆はにや〳〵笑ひながらこの話を傾聽してゐた。

俊雄はともすると、病氣とあの女とを結びつけて考へた、それは寔に愚しいことで

であるが、あの事があつて以來、執念深くつけ廻して何事かの復讐を企計らんでゐやあしないかと云ふ恐怖からと、も一つは自分はまだあの女、若い仲間からWicked woman と名づけられてゐる繁彌に未練があるからではないかとも思はれた。眞砂見番の毒婦藝者繁彌……さうつぶやいては笑んだ俊雄は、確かにある呪ひをかけられてゐると知りながらも、その妖氣に引きずられて思ひを斷ち得ない不思議な自分の姿を幻しに浮して見た。谷崎潤一郎の書いた才に惱まされつゝ自已の生命を凝視つてゐる己之助は丁度自分ではないだらうか。俊雄はあの一件を考へ始めた。

未練

——盜汗後篇に代ゆ——

一

此頃趣味に遠ざかつてゐる日下は、仲間の若い男女から見捨てられた形で、一年〳〵に老けてゆくにつけて何とも形容のない寂寥を覺えるやうになつた。殊に文學好きの集り春日會のグループの中にあつて采配を振つてゐた頃には、家にも大勢の勢の好い青年や、處女や、或は人妻の如きも趣味にひかれて出入してゐたので、それらから來たる刺戟と賑やかさとに紛れて單調なサラリーマンの生活を意氣あらしめたが、彼の年と共に進んでゆく社會的向上の野心がこれらのたづなを脱せしむるべく餘義なくせられて、すつかり内外の生活が事務的に單調になつてしまつた。しみ〴〵思ひ廻らして見ると、今の生活が果して本當の生き方であるか、お前はお前の生活を僞瞞しては

ゐないか、お前はお前自身の生活をもつと充實させてはどうだ――と考へさせる。その充實といふ點に至ると考へが毎時も行き詰まる。一體充實とは、物質にか、または お前の憧れてゐる戀愛にか……。彼は無論詩人といふ側よりも俗人であることを是認してゐた。同時に人間らしく生きたいといふのはその抱いた全部の希願であつた。そして人間らしく生きる上に於て是非附隨せねばならぬ條件があつた。それは人生の唯一の彩りたるべき戀愛だつた。流行の難かしい言葉を借りて謂へば戀愛至上主義者とも云へやう。然しほんとのところは意義のある戀愛とか、プラトニックラブとかこんな難解な物を欲求してゐるのではなかつた。……(唯一度思ひ出となるべき戀がしてみたい)……の程度のものだ。例へば麗らかな春光を浴びながら、菜の花の咲き亂れた野邊の細道を情人と手を引きながら戀を語り歩くやうな、中學生や女學生のやうな淡い幼稚な戀でも可いのだつた。短かい學校生活から直に植民地に出てサラリマンとなつた彼は、暗い女から爛れた肉の洗禮を受けて、さもしい欲求を充たした外、親から

無理やりに押しつけられた妻との關係の外、半生の今日に至る迄戀と稱すべき何物も有せないので、全く人生をつまらないものに思はないではゐられなかつた。それでも春日會のグループに、は入つてから若い女達の折々寄越す艶めいた手紙に多少はそれらしいものを認めて、ある滿足を感ぜないではなかつた。中には、日下露光さまといふより露光先生と云つた方が親しみがあつて可いから、これからさう云はして下さいなど、甘つたるい小娘の紫インキの手紙を貰つたりした。それ等に對しては色文とも つかぬ樣な返事を書いたりした。世間の所謂眞面目な人はさうした行爲を不良行爲といふに違ひない。若い男女を毒するものと嚴しい批判に一も二もなく爪彈きするに違ひなかつた。けれども彼の割り出したロジックからすると戀が相對的である以上は差支へのないことだつた。假令その戀が結婚に終らない左と右に別れる淋しい末路であつても、相手が娘であらうと人妻であらうと、妻も子もある男であらうと構はないのだ。お互ひの喜悅だ。

總てのものが結果はなるやうにしかならぬのだ。罪惡とか良心とか眞理に反くとか難かしく云へば戀などは出來たものではないといふのだ。一切を超越して戀をしたいとの願望だ。淡くも濃くも戀を味ふことだ。

ところが、實際――理性に隨した彼はそのロジック同樣に戀が摑めるものでなかつた。こんな艶めかしい手紙を貰いながらも、身の周圍を凝視することを忘れなかつたそこには世間と良心との計量を加減することを忘れなかつた。そして尙且つ希願たる戀に浸ることを忘れなかつたヂレッタントだつた。然しその過去の沙漠を歩いて來たやうな單調無味な半生の或時、やつと戀とも名づくべきオシアスに辿りついたのが、あの春日會解散後間もない頃の自分の出てゐる××銀行の女事務員山川繁子といふ若い女性だつた。そのたつた一度の戀?も繁子の無理解と己れの輕擧から詰らない結果に終り、剩さへその後永く病氣を煩つた末××支店長といふ椅子を與へられて榮轉ではあつたものゝT市から數百里の田舍の此處へ轉勤となつた。その動機が目下は危いから女氣の少い××へやつた方が好からうとの支配人の親切からと忖度すればせられないこともなかつた。尤も理由の大なるものとしては永らくの間椅子を空にしてゐたといふのが眞因であるけれども……。

斯うして彼は春日會からは離れ、刺戟の多い都會からは遠ざかつて日常の忙しい事務と家にあつては家族に親しむか讀書する位のことになつてしまつて、また過ぎし日の單調を嘆こつ男となつてしまつた。兎も角あの頃は自分として一事件を起して心の試練を要した彩りもあつて人間らしい刺戟を感じたが、それらの女との間も自然遠くなつてしまつて、手紙さへ絶へてしまい急に火の消えたやうな淋しさを感じだした。殊に生活が地位と共に滅切りと落ちついて、あまりに人の父らしくなり、妻はあまりに奥樣々々じみて來たことが却つて生活を單調に思はせた。(もう若い娘などは自分達をふりむいても呉れまい)さうした考へがたへず腦裡を掠めて妙に寂寥を深くした。これは生活足りての不滿だ、贅澤だ、もつと深刻に人生を考へぬからだと自己を凝視

してもその寂しきは消えなかつた。(もうお前の子供達がやがてお前の心の奥に巣喰つてゐる或物を求める時になる)……と考へて氣耻かしく思ひながらも矢張り何物かを求める心は消え失せない。これをもし個性だと指さすものあらば身に漲る血を洗ひ流してほしいとさへ思つても駄目だ。神を信じてみやう、一心に心身を修養してみやうと思つてもさてどうすることも出來ないのだ。かうした考へに耽ける時、死んだある友達が或夜(君には女難の相がある)と云つた言葉を思ひ出して苦笑することさへあつた。だがその女難を欲してゐても中々に女難は湧いてこないではないか。女難といへばたつた一度の女難、繁子との問題も行くところ迄行かずに流れてしまつたことを思へば、今更のやうに惜しい氣がして、あの陰鬱のやうで男を魅惑する繁子の面影を思ひ起さずには居られない。

二

曠野の冬がきた。このM洲ではちよんぴり々々しか町里がなくて、可なりな都邑でも少し歩を移せば、見る限りの原野だから、寧ろ曠野と云つた方が適はしく思はれる——十月末に降つた雪がその儘となつて、眼の限り、家も街路も、畑も山も眞つ白で單調な景色となつてしまつた。折々の風でうなるあの電柱の音、さうして家々の煙突から這ひのぼる眞黑な煙りが、それらの單調な風致を破るばかりだ。道端に掻き蒐められた雪を喉のかわいた、のら犬が旨さうに食つてゐるのもこの土地ならでは見られぬ荒寥な圖であつた。十一月——十二月と日が往つてゆくに連れて日足はだん〳〵と短かくなり一種の心細さを感じさした。自然の景色が單調にさうして荒寥になるに從つて××銀行員たる日下の仕事は忙がしくなつて行つた。

彼は仕事といふ點に於ては人後に落ちず働いた。凡そ人生に於て仕事と戀愛ほど意義あるものはないといふ日頃の信念からであつた。Mの冬の所在なさも、心の空虛も忙しい仕事の爲めに暫く忘れてゐたが、ある日仕事から歸つて、T市本店の若い友達のひとりから來た消息の末尾に、可愛想にあの妖婦山川繁子も一件以來はしよんぼり

と沈み返つて、見る影もなく哀れにしほれてゐます、今は見返る男もないのみか家庭の事情のためか、耻を忍んで日々仕事に携はつてゐる姿は、黒い事務服を纏つてゐるだけに尼さんのやうに見えてなりません――と書いてあるのを見た時、日下は急に繁子が哀れに思はれて、若し今自分と一所にでも勤めてゐたら耻も外聞もなく、抱きしめて心ゆくばかりに過ぎし戀を囁き、お互の淋しい人生を嘆きたいやうなロマンチックな空想を頭に描いて、當時のことを思ひ起さないではゐられなかつた。

夢のやうな氣分になつて、窓の外を眺めてゐると、朝からどんよりと曇つてゐたが、遂に雪となつたのか、白いものがちらり〳〵するのが眼に映つた。――戀を思ふに適はしいシーンだな――彼は露西亞物の深刻な戀愛小説の主人公となつた氣分で、その上のことを追想した。

あの時だつて、決して自分としては彼の女を窮地に陷れ、彼の女のコケチッシュな醜悪な手練を露いて復讐するために、創作『變心』を××誌に發表した譯ではなかつたのだが、彼の女の怜悧と男に對する憎悪と友達の入れ智慧とが、事を大きくしてしまつて自ら首を縛るの愚を敢てしてしまつたのだ。自分のつもりでは何程か文學を解する彼の女に、三十男の寂寥と單調との生活から求めて得られない、戀の慰めと同情とを得たいための仕業に過ぎなかつたのだが、それが單に彼の女の隱された情事をさらけ出して耻かしめを與へたものに曲解されて、すつかり怒らしてしまつた。あゝいふ結果に終るのだつたら、最初あの原稿を彼の女に示してそれから發表した方が自分としても繁子にしても都合が好かつたかも知れぬが、當時裏切られた折角掴み得た戀を失つたといふ失望から無斷發表して其の雜誌を贈つといふこと、どの點から見ても拙い行爲だつた。然しそれは極く打ち開けたことであつて表面創作である以上は裏面が事實であらうと、虚構の事であらうと、彼の女に贈つたといふことは春日會の一員である以上は何等藝術的にもやましい理由ではない。唯彼の女が狹量だつたのだ。無理解だつたのだ。作中のも一人の女のやうに理解があつてほしかつたのだ。今ひとりの

上田咲子は『私はどれほど深刻に身の上を扶ぐられても藝術といふものに對しもお恨みを申しません』と手紙を寄越したではないか。

然し、然し、飜つて考ゆれば、あれで好かつたのかも知れぬ。淡い戀がだん〳〵と深くなつて、お互に苦しみ悶えのたうち廻るまでに至つたらどうだつたらうか、今頃俺の物質生活はどうなつてゐたらう、戀を得た代りに職を失ひ、妻を失ひ子を失つてはゐなかつたらうか――だが物足りない、不斷にさうした深刻な戀に醉ふこともお前の要求ではなかつたか、さうしたお前の常識が戀を失ひさうして絶えず何物かを求める寂寥の心境に導くのだ――。

三

その日は何かの用事で本店へ出勤したのは定刻より二十分ばかりも過ぎてゐた。廣い事務室には若い事務員達が或る者は算盤を彈き、或者は帳簿をめくり、或る者はペンを動かして、もうそれらの大勢が緊張して仕事に携つて、金の出入に來た客もちらほらと影が見えた。

彼は毎時の通り行員の出入口たる通用門の方から事務室に這入ると、ドアの正面には毎時通り突い立に仕切られた一廊に陣立つた支配人が眼に入つた、――とその前に立つてゐる二人の女事務員の姿が、丸で活動のぼかし映畫でも見るやうに浮かんで來た。ひとりは尾形文子、ひとりは山川繁子だ。繁子が泣きながら何か本らしいものを支配人に指してゐるのが妙に際立つて見えた。彼は直ぐに『あの一件だな』との豫感が胸を突いた。然し何喰はぬ顔をして、稍亢ぶる心を押さえ々々自分のデスクに腰を下すと、一種の照れ隠しに彼の下に働いてゐる池見といふ若い事務員に口を切つた。

『いや失敬、僕、用事があつて一寸遲くなりました。何か來てゐませんか』

『あ お早う、いえ別に何も』

それから思ふとなしに女達のことに心を奪はれながら、机の抽斗から朝日を出して

二本も續けて吸つた。

午後までは何となしに氣が焦々して、碌に仕事もしずに過ごした。食堂で支配人と一所に晝飯を濟まして煙草をすつてゐると、人の好い禍々した支配人が笑顔を作りながら何氣ない體で、一寸と別室に彼を呼んだ。

支配人は肘付の椅子に腰を下してから稍眞面目な顔に返つて、『まあそこに掛けたまへ、少し話があるから』と反對側の椅子を指した。彼は何だか裁判官の前に出るやうな、いやな氣拙い感じをしながら腰を下した、

『實はね、日下君、山川が僕の出勤を待つてゐてね、譯も云はずにめそ〳〵泣くんだ何ですか遠慮なしにお話しなさいつても、くす〳〵泣くばかりさ、これを見兼ねたのか、尾形が來てね雜誌××の小說『變心』は事實は嘘でこれでは山川さんが可愛想ですと云ふんだ』

支配人は言葉を切つて葉卷に火をつけた。

『貴女達のやうに突然來て泣きを入れられても僕にはさつぱり判らない。要するに作者が日下君だから日下君に訓誡を與へて、迷惑を取消して貰ひたいといふのでせう、宜しい、ぢやあとで一應僕も讀んだ上で是非を極めませう……といふことで女達を仕事に就かせたが、あの創作を讀んで見ると僕等第三者から見ると單に藝術品であつてそこに何等ごた〳〵は見えないが、唯君があの本を當の山川繁子に渡したといふことはどうも少し拙いね』

『あゝあの創作のことなんですか、いやどうも何とお答へして好いか一寸當惑しますね』

『いや君、誤解しちやいかん、僕は今、此處で君を責めるのぢやないが、只君の作品に就いて批難する理由を持たないが、兎も角、斯ういふ若い者の大勢ゐる銀行なんかぢや、云ふまでもなく風儀を紊すやうなことはお互ひに警戒しなくてはならないし、殊に君などは既に監督者側にあることだしね』

『どうも年甲斐もなく痛み入ります。丸で不良少年のやうで』

『いや、いや、僕は君の承知の通り文藝方面の趣味も多少あるし、斯うした經驗には理解を有して居る積りだから漫然と批判を下す譯ではないが、然し、あの作品中の『眠』は可なり若い女の心をひきつけるに足り、又可なりの優秀な詩であるが、その力あるものが君の手に依つてぢかに山川に與へられたといふことは尠くも面白くない事實だね、此際僕としては君に註文したいのは、文學を理解する能力を持たないものはどうも誤り易いと思ふから、努めて戀愛じみた作品の交換、詩歌の發表などは見合はしてほしいと思ふ。これは必ずしもやるなと僕が藝術の領域まで指圖するのではないが、詰まり、題材を選び、範圍の狹い當店内の如き所から種を拾はないことにして貰ひたいのです、改つた樣で失敬だつたが、僕の立場として一應、君に意見を述べて置きたかつたのです』

支配人はかう云ひ終へてから輕く笑つて吸ひさしの葉卷を口に當てた。

『良く判りました。全く不謹愼でした。今更辯解の餘地もありませんが、實は彼の女が我々××誌のグループの同人だものですから、遂どうも』

『僕はほんとに何とも思つてやしませんよ、今云つただけの事です、ぢや君も氣を惡くしないでね。』

二人は一所に立上つて、再び食堂に這入り熱い紅茶を啜つたが、日下には何となしに女の淺慕な仕業が腹立しく感ぜられて妙に興奮を覺えた。

四

その小說といふのは――ある三十過ぎた妻帶の男が、趣味の上からと、も一つは過去の青春を取り戻さうといふ心から、若い女事務員と淡い戀、戀と云ふ迄に至らない狀態にある時、その女は他の若い英語敎師とある意味の交際が出來たので、男は嘗て經驗しない眞實の青春に邂逅しながら折角の青春を取り逃がした氣がして、若い者は遂に若い者の世界であると諦めをつけてゐるうち、英語の敎師が轉任したため、再び

女が歸り來り、ある公園のベンチで女の心の鍵を握らうとするとき、ふと家にある貞節な妻のことを考へて變心する――といふ節であつた。彼女が憤慨したのはその中の英語教師との情事、並に公園に於ける密會の件りが嘘だといふこと、も一つは男から男へ移るやうなコケッシュな女でないといふことだつた。

日下はその日家へ歸つてから、夕食もそこ〳〵にて座敷兼書齋に籠つて一件の經緯に關せることを尾形文子宛にながく〳〵と手紙を書いた。

――尾形さん、私は特に此處にお世辭をいふ譯ではないが、今迄私は貴女を大勢の女事務員の中でも總明な方として兼ねて敬意を拂つて居りました。然し今日の一件は貴女として、貴女の取つた處置として、果して思慮のある遣り方でしたらうか、私は强ち自分の非を掩ふためにのみ申上げるのではありませんが、一體あの繁子さんといふ方も悧好な方ですが、けふの事はどちらが持ち出した事ですか、想像するに山川さんから泣きつかれて、貴女は男の仕業を憤慨するの餘り支配人に訴へることを勸めたのでせう。よしやこれは當つてゐなくても、けふのことは兎に角愚なことです。女が泣きながら支配人に訴へる……何と云ふみつともないことでせう。それでなくてさへ若い男は女の事と云へば眼をみはり耳を峙てゝゐるではありませんか、貴女方は嘘であることを主張しながらその嘘をまるで廣告したも同樣です。たゞぢつとしてゐればあの作品の內容が嘘にしろ、ほんとにしろ、知るものは本人ばかりではありませんか私は貴女がそこ迄に考へ及ぼされなかつたことを非常に殘念に思ひます。同時に輕信してあの創作を發表した私の不明を恥かしく思ひます。これは卑近な例かも知れませんが、世の中の澤山な小說の中には、どれかが或人の境遇や事實に充てはまるものがあるとしませう。その充てはまつた人達が、あの小說は俺のこと、妾のことを書いたものだと怒りだしたら滑稽な事になりますね。又、あの『變心』の作中の男、若くは作者たる私は假に事實としてもあれ以上にどんなことを考へてゐたかは貴女は知りますまい、或は作者は作中の女主人公の愛に引き摺られて、同情を求めるためにしたの

かも知れない、若くは女を呪つた結果とも見えませう、何れにしても作意を確めずに今日のやうなことは仕出かされたのは私として聊か迷惑に思ひます。尙、けふの目的は何でしたらうか、私の驅逐といふ目的でしたらうか、失敬だが何處かに陰暗なそして執拗な心の持ち主の山川さんだから、瓢乎すると涙でさうした欲望を滿さうとの腹があつたかも知れませぬが、男一人の前途がかうした些細の事實でどうにもならぬことは分り切つたことではありませぬか、私は少し亢奮してゐるかも知れません、私の行つたことの惡るかつたことは充分認めますが、貴女達の行ひに就ても萬全でせうか賢明な貴女に一矢を放たないではゐられません。大人氣ない樣ですがこの書を送ります——。

豫ねて勝氣な、そして女事務員達を指導してゐるやうな尾形文子は、あの手紙を貰つてから一夜を考へ明かしたことであらう。その翌朝は銀行の暗い廊下に彼の出勤を待つて自分の淺墓を詫びた。

『尾形さん、僕は貴女に詫びを云はせる筈ではなかつたのです。世の中といふものが單純でないといふことをたゞ知つて頂きたかつたのです』

『いえ、全く私が惡るかつたのです。繁子さんとは餘り近しくもして居りませんけれど、あんまり樣子が可愛想ですから、遂、わけを聞いて亢奮してしまい、支配人に訴へることをお勸めしました。私としてはそれが最上の手段だと思つたのです。尤も繁子さんにもその心持ちはありましたが、兎に角私の思慮が足らなかつたのです。母にもあの事をその夜打ちあけましたが、お前が馬鹿だからこんな深入りをすると叱られました。ほんとにすみませんでした』

文子は眞赤な眼をしてかう云つた。その夜如何に彼の女が悶々の情に一夜を苦しんだかが窺はれた。

『さあ、お互が諒解したら、この事件は打ち切りにしませうよ』

日下は女との立話を聊か迷惑に感じながら逃げを打つた。

『でも繁子さんは、それはそれは恨んでゐらつしやるのですよ、日下正也なんて名前は地の底へもぐり込めつてね』

『さうですか、まあ無理もないことでせう、大いに恨まれませう、然し僕はまだ貴女に對しても話したい事が澤山ありますが、事件のあとではあるし、お互がかうやつて居ることも變に思はれる位ですから何れ他日、ね』

さう云つて文子と別れたが、事務室に這入る前にも、繁子の妖艶な幻影が、何かの脅威を與へるやうに彼の眼に映じた。

五

そのことがあつてから間もなく日下は肋膜炎を煩つて永い間病院の白いベッドの上で、退屈な時を送つた。繁子とのごたゞを興味を以て眺めてゐた彼の仲間の若い者達は病院に見舞に來ては『あなたはあの毒婦から屹度呪はれてゐたんですよ』と冗談口を利いた。毒婦——さう名づけるには少し可愛さうであるけれど、あの何程か濁つ

てはゐるけれど、凝乎と瞳を据えて男の心をすかすやうな視線は、堅氣の娘の持つ瞼ではなかつた。彼は机に向つて事務を取りながら、折々その惱ましい程チャーミングな瞳にぶつ付けたのだ。あの眼が歌となり詩となつて終りに戀の形になつてしまつた彼が女を慾するやうに、彼の女も青春の惱みから押へ切れない性の欲求から男を求める心が、焰となつて瞳に現はれたのかも知れない。然し、性情から考察すれば所謂母性型の女ではなかつた。娼婦型だ、職業婦人として戀から戀へ命を繋いでゆく女だつた。さうした感じが男の胸に何時とはなしに響いて、遂に毒婦若くはウイッケッド、ウーマンなどのニックネームを奉つたのかも知れないが、一本氣な若物達は彼に同情して、涙で支配人を射落したといふことが、毒婦の名稱をつけた主因らしかつた。

彼は白いベットの上でも、彼の女との事件は何と云つても印象深いものゝ一つだつたので、折々は女のことを考へた、そしてそれは憎しむといふよりは、哀れつぽく持ち出して若一度捩りを戻したいやうな戀態な心であつた。

『ねえ繁子さん、あの一件は全く僕が惡かつたのです、詫まるから勘忍して頂戴ね、お互が一所に勤めてゐて氣拙い顔をするのもいけないことですからね、私はどうしても貴女を忘るゝことが出來ないのです』

『……』

或日にはかうした會話まで心に浮かせて俺はなあサディズムになつた男のやうだとひとり薄笑ひをして、谷崎潤一郎氏のお才と己之助やお艶と新助を思ひ起したりして寢返り打つた。

或日には又彼の女が、ジューマの三銃士に出る妖婦ミラデーや、ルブランのアルセン、ルーパンに出る妖婦黒衣の女のやうに思はれて、影や形と付き添つて呪つてゐやしまいかと思はれたりして、寢ながら讀み耽つた種々の小說の中の毒婦の姿や行爲が皆彼の女の顏となり姿となり行爲となるやうに思はれたりした。又或る夜は恐ろしい夢に襲はれて看護婦に起されたりした。

『いゝえ駄目、貴方がなんと仰つしやつても駄目、繁彌さんは男を呪つて呪ひ盡してやると云つてゐるから、外の人の座敷だつたらどんなとこへでも出るけど、何故か貴方丈には一生會はないつて、云つてゐるのです、屹度何か複讐の手段があるのでせう』

『おいそんな情ないことをいふのぢやない、ねえ文ちやん、文勇なんて嫌な源氏名を捨てゝもとの尾形文子に歸つて、僕の蔵ひをねたつた一度きりでいゝから會はして、ね、君はあの件以來僕の同情者ぢやなかつたか』

『いゝえほんとに駄目、私もむかしの堅氣の文子だつたらね、或は貴方を信用したかも知れないが、男といふ男を知りぬいた今はもう貴方の味方ぢやないのよ』

『ねえ、頼むから、そんなことを云はないで、ひと目會はして呉れたまへ』

『貴方も隨分執拗いのね、私達二人がどうして、文勇とか繁彌とか名のつて藝者になつたかご存じでせう。私はあの氣眞面目さうな支配人に處女のほこりを失つたし繁ちやんは貴方の以後××さんで失戀したし、貴方達のやうな戀の眞似ごとなんか飽き々々

してゐるんです』

『ぢやどうしても繁彌は會つて呉れないのかな……。僕はも一度あの魅力に富んだ瞳を所有して見たゐんだ』

T市の待合春の家の一室で久し振りに變つた文子と出會つた日下は繁子も藝者となつてゐることを聞いて是非會ひたいと文子に哀願したが、遂にその目的も達せられなかつたので、半ば自棄の心になつて強か酒を呷つて文子と別れた時は夜も大分更けてゐた。

春の家を出た日下は急に氣付いて後ろを向くと今まで賑やかに明りがついてゐた春の家は空屋かなんぞのやうに眞つ暗になつて、陽氣だつた女の聲さへ影のやうになくなつた。一歩二歩と歩む中に、町中に俥一臺居らぬのが妙に心淋しく感ぜられた。

――はてな――かう思つた彼は町中をづうつと見廻はしたが、何程夜が更けたとは云へ、かたとも物音さへなく、家並々々は青白い月の光に死人のやうに横たわつてゐた死の町――ぞつと、さう感じて再び見廻はした時は何時しかN公園の森に來てゐた。

森も死んだやうに靜かで胡藤樹の林の中の一筋の道が妙にはつきりと浮いて、丁度こちらへと何物かがさし招くやうだつた。日下は魔物に憑かれた氣で恐る〳〵足音を偸んで、白い細道を林の奥へ進んで、小高い岡まで來た。此處は落葉が一杯に散りしかれて滅多に人の來る場所とも見えなかつたが、それでもその落葉の上に微かな人の足跡が細い道をなしてゐるのが明確に見えた。いまはその道を辿るより外はなくだん〳〵と進むと、足跡は大きな楡の木の根で消へてゐた。

日下は何の爲めに此處へ來たのかといふ意識も何にもなく、その大きな楡の木を靜かにひと廻りしてから幹の人の丈ほどのところに眼をやつた時、妙な人形のやうなものを發見した。不思議に思ひ〳〵採ぎ取つて見るとそれは明らかに藁人形であつた――丑の時參り――莫迦な、今時そんな事するものがあるものか、この文明の世に、さう心に叫びながら仔細に人形を調べると人形の手から足から咽喉から頭から細いピ

ンを見出した。矢張り呪ひの人形だつたのか。

日下はひとり言を云ひ〳〵人形をほぐしてゐたが、やがて、人形の心から紙に字を書いたものが出て來たので、折からの月光に透かして見た。

（日下正也）――その紙に呪ひのピンの跡が、蜂の巣のやうにしてゐた、あつ！ 繁子の字だつ！ 彼は人形を大地にぶつ突けると、蹌踉として恐怖と憤怒とに倒れかゝつたのを、やつと側の楡の木に抱きついた時、何處からともなく淋しい女の笑ひ聲がした。

『日下さん、胸がお痛いんですか、如何、お熱計りませう』

夢半ばに看護婦に起された日下は、盗汗をびつしよりかいてゐた。

看護婦から驗温器を受取つて脇の下に挾んでから、考へた『俺があまり彼の女を氣にするもんだから途方もない夢を見るんだ。よもや呪はれて横腹に水が溜まるものでもあるまい』

斯くて彼は病氣の原因を眞面目に考へたりして、退屈な入院生活を過ごしたが永いその月日の中に尾形は白ばらの植木鉢を見舞に持つて來たりして、二三度もやつて來たが、繁子は尾形の云ふやうに本統に恨んでゐたのか、一度も顔を見せなかつた。

六

兎も角、山川繁子は日下の半生に思ひ出を作つた唯一の女性だ。妖婦とか毒婦とか名づけはしたものゝ、見る影もないやつれ方をしてゐると聞けば、何だか泌々可愛想に思はれてほんとに自分があの一件で、彼の女の青春を奪つたかとも感ぜられ、今にもT市へ行つて思ひの丈けを慰めてやりたい氣がしてならない。『さうだ差し詰め手紙を書かう』

日下はこの二三日さう考へた頭を惱やましてゐたが、この未練な心が果して何の程度迄繁子に通ずるやら、前に文子が云つた、日下正也なんか地の底へもぐり込んでしまへとの繁子の恨みの言葉を思ひ起すと、一本の甘い手紙では容易に舊情が暖まりさ

うでもないし、殊に以前の失策を再び繰り返すやうなことがあつては今の地位上面白からぬと思ふと、折角思ひ詰めたこともゆるんで、實行の勇氣がなくなつた。

『俺は是だから戀なんか一生出來なんだ、熱がない、熱がない』

日下はさう考へながらも、繁子の魅力に富んだ瞳を思ひ起して、何日かまた好い機會もあらうと果ない望みに慰められて、忙しい仕事の方に思ひを向けた。

死の價

人の好い西田一等卒は、晩餐後つい好い氣持ちになつて、大きなテーブルに凭れながら、こくり〳〵と舟を漕いでゐた。

『おい西田!! 西田!! 。』

西田は肩を叩かれて、叱驚して眼を覺すと本能的に飛び上りさま、直立して擧手の禮をした。彼の右腕にはその正直と勤勉とを表象する爲めに、山形の三本の赤筋が着いてゐた。

『何に、そんな叱驚するにもあたらないよ。山川伍長だ。

『や、これは失禮しましたつい好い氣になりまして。

何時の間に風が起つたのか、凄まじい音が外の面でする。雪も交つてゐると見へて硝

子窓に白くその影が映つてゐた。

『西田、お前烈しい吹雪になつて御苦勞ちやがな、河村上等兵が風邪具合で、警乘に行けないから司令代りで勤務してくれないか、若し都合が惡けりや田中をやるが。

『はい、宜しくあります、私が參ります。

『行つてくれるか、それぢや序にこの＋＋中尉殿の手紙を聯隊司令へ渡してくれ。山川伍長は用を濟すとさつさと奥へ行つた。西田は氣乘のしない樣子をして、山川の後を見送つてゐたが。――行の汽車の時間が切迫しゐることに氣つくと慌てゝ身仕度を始めた。そして他の一人の同僚とともに吹雪を突いて營門を出た。××停車場のアラヂン燈が遙かに明るく見ゆるのを目的に、闇の中を三人は默まつた歩いた。劒尻が臀部に當つてがちや〳〵鳴る音と、重苦るしい靴の音とが、風のまにまに聞えた。

『こんなでも歩くと暑い。

誰かが獨り言を云つた。西田はその時謂ひ知れない不安な豫感に襲はれてゐた。

停車場の待合所の怪しげな暖爐で、十分あまり暖を取ると汽車が這入つて來た、西田は前の司令から引繼を受けると他の同僚とともに受持ちの車室に乘つた。

風は何程か凪いだけれど、雪は降つてゐた。汽車の走る響きと、吹雪の音とが物凄く聞えた。遠くから來た人達であらう電燈に顔をさらしながら眠つてゐるのが多い。ひとり冴えた頭をして車室の一隅にぢつとしてゐる西田は、今夜に限つて妙に故郷の父母が戀しかつた。

―驛―驛と過ぐると、汽車は△△驛に着いた。三人の兵士はここで交代するのだつた

――二分停車　――驛夫の喚呼を聞きながら西田は次の司令へ渡すべき書狀箱と、＋＋中尉の手紙とを持ちながら列車から降りて來た。實に實にその瞬間だつた。一陣の魔風は中尉の手紙を奪つて、反對の線路へ持つて行つた。勤務に忠實な彼は何の躊躇も、何の思慮も要せなかつた。彼は風に弄れながら、ひら〳〵と飛んで行く手紙のあとを追つた。然し次の瞬間――線路上の吹きだまりの雪の上の手紙に手を觸れんとす

る瞬間に勢よく這入つて來た、行き違ひの貨物列車に命を奪はれてゐた。腕が、胴が、別々に。赤い血潮が白い雪を彩つた。

歩兵一等卒西田――之柩

白い弔旗が寒風に靡つて、彼の戰友達に送られたのはその翌日だつた。

二三日してから。少し血の滲んだ十中尉の手紙が宛名の△△少尉に届いた。少尉は不思議な血潮にちよつと顏を曇らせてから封を切つた。

――こないだは失敬、あの晩はあの儘醉ひつぶれで、お陀佛さ。君、何時歸つたのかちつとも知らないのだもの、奴、怒こつて居たぜ、今度入らすつたら屹度敵を取るなんて。おい何かおごれ……。

飯

烈しい霜の朝であつたけれども、空は玲瓏と澄み渡つて、雀は嬉々と空中で宙返りをしてゐた。

德明法は百姓の子と生れた悲しさに、毎日〳〵寒い冬に向つて、家を暖める燃料を集めねばならなかつた。朝東が明るんで、雀が眼覺むる頃から、一塊の包米飯を淺黄の風呂敷に包んで、落葉掻きを肩にして、野や、山に落葉や枯草を集めた。德は七つの時からやらされて、ことしで二年目である。とつぷり日が暮れて、羊を集める木魚の音を聞いてから、家に歸らねばならなかつた。斯くて日がな一日驢馬のやうに、芝や枯草のあるところを、落葉掻きを引摺つてかけ廻つた。この單調な任務は幼年の彼をして厭き〳〵せしむることが多かつた。

今朝も毎時通りに家を出た。晩秋の空がその青い底の底まで、見透されるかのやう

で、何となくうれしかつた。少し場所を替へて、△△附近の鐵道線路側に至ると、他の仲間がまだ荒さない澤山な枯草に行き當つた。けふは何時もよりも早く仕事が仕舞へるといふ歡喜が先づ胸をついた。德は氣持よく落葉かきを引き摺りまはした。折柄長い貨物列車が下り勾配になつてゐる德のそばを素張らしい勢で走つて往つた。德は何氣なく汽車を見返つてゐる中に、自分の單調な生活を破るべき、砲天荒な慰み事がふいと浮んで來た。

『うん。こりや面白からう、あの貨物列車をひつくり返すなんて。』

德は旨い考へが湧いたもんだと、小躍りをして喜んだ。

『あの素張らしい威勢の好い汽車が、俺の置いた石で一度にひつくり返るんだ。それからお叔父さん達が騷ぐのを見てゐやう。あの走い貨車がから〳〵と壞れる。ほんとに面白いこつた』

德は樂しい空想に呆然と突つ立つて、日光に輝く長い線路を凝視した。軈て自分を

慰めることに囚はれた德は、あらん限りの力で大きな石を集めて線路上に積んだ。

『おゝ何處かで汽車の笛が鳴るすぐに〳〵に面白いものが見られるぞ。』

德は片唾をのんでその結果を待つてゐた。然し汽車が轟然たる音響を立てゝひつくり返る前に、德は線路工夫に縛られて、××の停車場に連れて行かれた。德は工夫から石を積んだのはお前かと尋ねられた時、はい私だと、明確に得意氣に返事した。それは全然「惡」だとは思はなかつたから。

停車場の事務室の一隅に繩付のまゝしやがんでゐると、大人達は險しい眼をして德を見やつた。德はそれに對して何の怖れも抱かなかつた。然し間もなくして父母や祖父迄が、嚴めしい兵士に護衛せられて來た。父母や祖父や兄などの眼に、涙があつたのが不思議に思はれた。

その夕べ××驛から××驛に送られて、その兵隊屋敷の暗い部屋にぶち込まれた。金筋をつけた、サーベルをがちや〳〵鳴らす髭の兵士や兵卒などが、自分等の爲めに

忙しい思ひをしてゐるやうに見えた。明日は××の支那官憲に渡されると父たちが小聲で話してゐる。さて何故斯うも大きなごた〳〵が起つたもんだらうか、德は精一杯考へて見たが分らなかつた。

夕飯が來た。白い暖かい大米。おゝ何時からか喰べたい〳〵と思つてゐた、大米の御飯に、旨さうな漬物が添へてあつた。德は雪のやうな美しひ飯に箸をつけやうとする時、自分達が常食してゐる、貧しい高粱や、包米飯を思ひ起した。こんな旨いものを食べてお腹がおつ魂消はしないか。俺達はこのまゝ兵隊屋敷で御馳走を食べ、それから、中國の衛門で又々澤山な馳走に預のるのではあるまいか、

『父ちやん、母ちやん 何故御飯を食べない？』

德はしをれ切つてゐる彼等にかう謂つたが、恨めしげに自分を凝視するばかりで、何とも返事しなかつた。德は無遠慮に兄の分をまで貪り食つた。飽食は嬲て睡眠を齎らした。彼は今朝がた何故汽車が轉覆しなかつたかを考へ乍ら、堅い板壁に脊を凭せて

幸福な夢路に這入つた。

大正七年一月作

無情を感じた話

久しく消息の絶えてゐた安東の松原四郎から、日に〳〵衰弱の度が加はるばかりで今は靜かに死期を待つてゐるとの葉書を受取つた私は、更にその翌日の晝過ぎにマッバラキトクの電報を受取つた。

彼が私を知り、私が彼を知つたといふのは、同じM會社に奉職してゐたのが最大原因ではあるものゝ人に好かれない彼の性、誤解のみで見られた彼の性、狷介な直情徑行の彼の性格に同情といふより寧ろ憐れむといふ私の心が、私の周圍の一人として彼を齎らした。松原がぶら〳〵病に取り憑かれ同僚達から肺病と見做されて、嫌はれてゐるこの噂を聞いたのは、彼が安東に轉勤して半年あまりの後であつたが、その後三度の見舞狀に對して、一度の返事或は返事がない事もあつた。その疎遠の内に松原の

病氣は亢進しつゝ、且つその重體を引摺つて、安東病院は勿論大連のM病院、F大學病院、K病院等に病源を究めんと歩き廻つた。『胃癌』と決定した時は發病後二年に近く、頑丈だつた肉體はげつそりと痩せ細つてゐた、三十歳といふ年齢が病氣に對する醫師の判斷を迷はしたのだつた。松原はK院病で院長が手術しやうといふのを、彼の萬一を恐れる思慮から家族の所在に近い、大連のM病院で手術を受けることにした。

私は私用で大連に行く途中、この手術の話を知己の一人から聞いた。そして大連のN町の夜店で買つたゼラニュームの一鉢を持つて、M病院の一室に松原を見舞つたのは丁度その大手術を行ふといふ前日だつた。明日にも開くやうな苦みを持つたゼラニュームを、地藏尊が寶珠の玉を抱へた恰好で鉢を掌に支へ乍ら、消毒藥の嗅ひ暗い陰氣な病院の廊下を彷徨した。色の白い會釋の好い看護婦に敎へられて松原の室のドアを叩いた。『はい』と優しい妻君の聲がしたかと思ふと、靜かにドアが開かれて、

『まあ、宮川さんが』

と驚異の聲とゝもに妻君は、私に注いだ眼を松原の方へ歸した。不安と無聊とに苦しんでゐたらしい彼は、感謝に充ちた眼を輝かして、痩せた腕を擦りつゝ無言の儘迎へた。定めし烈しい焦悴に落ちてゐることだらうと期待したのに、寢臺に坐した松原の容體が意外に確かだつたのに驚かされた。私も無言の儘寢臺の傍へ進み寄つた。

『甚麼だね』

かう私から口を切ると、彼は淋しく微笑し乍ら、

『宮川君。僕は到頭この世の神に見捨てられたよ。明日手術の筈だが、命も怪しいもんだ』

と云ひ〳〵、伸びたあごの髭を引つ張つた。

寢臺の脇には吳蔗が敷かれて、八つの娘の子と六つの男の子とが晝寢をしてゐた。そして妻君は、時過ぎ子供の顔に襲ひ來る蠅をば、根の弛んだ丸髷を氣にしい〳〵ハンカチで追つてゐた。

誕生過ぎの子、ひとりは安東の知人に預けてあると、あとで妻君が云つた。太つた氣裂な妻君も、長い間の苦勞に陰氣な影が見えた。

午後四時を過ぎてはあつたが、西日を浴びた病室は、窓に迫る胡籙の葉や、厚い地の日覆を透しても、猶むし〳〵と熱かつた。松原と、その妻君と、私との間に久濶の挨拶が濟んでから、病氣に關した種々な話や私達の知己に對する別離以後の噂など取り交はされた。そうしてそんな談話の結びは、何れも松原の病氣に落ちた。

『僕ねえ、宮川君泌々そう思ふよ、這麼業病に罹つたのも、先の家内の恨みだと思つてる。この家内の前で云へないことだけれどね』

松原は曇つた顔をし乍ら妻君の顔を偷み見た。

私の胸には、先の妻君のことに就て、人々から知り得た種々な事柄が浮んで來た。その妻君といふのは松原の生國と同じ北國のM縣の女で、兩親の見立てゞ遙々と此地へ送られたのであつた。永い間旅に出て他人に揉まれて生活して來た松原には女の御

國育ちの生一本な調子が物足らなかつた。何れかと云へば女の方も正直といふか氣が利かぬといふか、世間並な女のやうに人が來てもお茶の出し方から挨拶の仕方から滿足に出來なかつた。新開地の氣分にかうした態度を直に當て嵌めやうと待ち構へた松原も無理であつたが、女も實際の所戸迷ひの姿だつたらしかつた。せめても容色でも優れてゐたら彼の滿足の幾分を充たすことが出來たかも知れぬが、それさへ二の町であつたので猶更彼の癇癖に觸れた。期待した新婚の樂しみに破れた松原は焦々した日が續いてその落ちて行くところは毎時妻君の身の上にあつた。若い百性育ちの女は氣心の知れない男ひとりを持て餘して途方に暮れた。松原は新婚の樂しみに裏切られたやうに女の胸にも同じ思ひが一杯であつた。異郷の空の色、木々の色、さては見廻す器具の一つ〳〵に迄云ひ知れぬ涙が宿つてゐた。離れ〳〵になつた二人の心を、どうしてこの女に纏めることが出來やう。その内に女は孕んでゐた。何んとも譬へやうのない倦怠が體に絡はつて、夫の出勤の送り迎へさへ缺ぐやうになつた。

一日の勤勞から歸つて來た夫に、亂次ないごろ〳〵した寐姿を見する日が多くなつたので、氣むづかしいといふより、何事にも儿帳面な松原には、田舍女の怠けた態度が矢鱈に憎々しかつた。女の平べたい顏に媚びる樣な、憐愍を乞ふやうな、甘つたるい表情を見出した時、堪え切れない嫌惡の情が胸に突き上つた。そして世間並な義理といふものに自己が縛られてゐることを呪つた。彼は事毎に女に對して『出て行け』と怒鳴つた。殘虐な行爲もした止め度なき女の涙に對して、何等の同情も持たないほど冷淡だつた。

女は始めて經驗した懷胎をそれと確めも出來ず、ひとりで小さな心を痛めた。女はこの心苦しい狀態を、國の兩親に手紙で知らして縱かに自らを慰めてゐた。然しそれも軈て夫の知るところとなり、彌が上の憎しみを享けて、慘めな日のみが徒らに續いた。

暴風雨のやうな日が半年も續き、女は傷ついた心を抱いて、遙々と國へ歸つた。さ

うして、それが永久の別離であつた。女は國に歸つて四月目に女の子を產み落した。

『どうして此の可愛い子が、那麼邪慳な父に渡されやう。どんな苦勞働きでもしますから、この子は妾に育てさして下さい。』

女はこう兩親にすがつて、後で子供を渡すことを拒んだ。

松原は自分の身の上話をするとき、或は雜談の後何時も口癖のやうに曰つた。

『あの時、女は孕んでゐたんだ。ごろ〳〵してゐたのもその性だつた。今になれば世間並の女房になつてゐたらうに、今思つても氣の毒なはご虐待して濟まなかつた。それだけ僕が若かつたんだね。その女の子のことを忘れられないよ。』

或る日はかう曰つた、

『歸省したら君、遇然と會つてね、五つばかりの女の子を連れてゐた。それが僕の子さ。僕はこつちへ歸ると柄にもなく、縮緬の衣裳一襲送つたよ。』

私は松原の危篤の電報を受取つて是から見舞に安東迄行くと、或人に示した時、意

外にもその人は松原の先妻のことを話した。女は子供が六歳の時Y軍港の海軍々人に嫁してひとりの男の子を產んだが、間もなくその夫に死なれて暫らく兩親の元にゐたが如何した機か氣違ひになつたとのことだつた。このことは松原も知つてゐるのかゐないのか、今の妻君の前で何程心安い中でも尋ねる譯にゆかなかつた。

『先の妻の恨みだなんて君も宿命論者になつたね』

私は暫くの沈默の後慰め顏にかう云ふと松原は『人の死なんとするやその言よし―さ』と淋しく笑つて私の持參したゼラニュームの花に手を觸れた。暫くして私の爲めに夕飯が來た。

『ねえ、宮川君これが友達との最後の晩餐であるかも知れぬ、僕もけふは箸を握らう』

『そんな心弱いことといふもんぢやないこのM病院でも有名なO博士が執刀するのだから心强いものさ。』

私もさう慰め乍ら暗い心持ちが全身に滲み渡るのを覺えた。そして『ありや君罪の

報だ』と松原を嫌ふ人達の言葉も思ひ出された。

子供達は晝寐から醒めると『この叔父さんを見忘れたの』と母親に云はれて不思議な侵入者をしげ〳〵見守つた末、無心に夕食の膳に向つた。軈て松原は『ほんとに今日は意外なお客でこの病人にも食が進んだよ』と箸を置いた。その大方は救はれぬといふこの病人のなす種々な仕業が私の眼に淋しく映つた。私は明日の手術の結果を見届けて呉れと松原がいひ、また私もそう思つたので明日を誓つて病院の門を出た。

陰氣な三等個室の寢臺の上に座つて長い首から飛び出した喉頭坊主を動かしつゝ喋れた聲で『宮川君明日迄是非ゐて呉れたまへ、そして僕の手術の結果を見て呉れたまへ若しものことがあつたら家族を頼むよ』と云つた言葉が宿に歸る迄耳の底にこびり付いてゐた。私は病院から宿まで恰も自らが病人であるかの樣にして俯垂れ乍ら道を歩いた。

その翌日約束を違へず子供達へ手土産としてカステラ等をぶら下げて再び松原の病

床を訪ふた。丁度魔藥が醒めたといふ所で心臟が丈夫の爲めに案外手術も旨く行つたと妻君が云つた。そして『十日あまりしなけれや結果が分りませんとO博士が仰しやいました』と妻君が附け加へた。松原は昨日程の元氣はなかつたが手術した局部を仰向けに寐たまゝ指し乍ら途切れ〳〵に說明した。私は無事に難儀な手術が結了したことを祝福してその夜の汽車で歸路に着いた。別れ際に握つた松原の手の冷たかつたこと。その手の冷たかつたことは長い間の思い出の種となつた。

それから十日あまり忙しい勤務の日にも松原の手術の結果を思つてその報知を待つた。

二週間を過ぎた頃の夕暮であつた。私は食後しく〳〵と痛み出した齲齒を氣にしつゝ窓に迫つた白楊や楡の綠りの葉―黑ずむで見ゆる迄に茂つたそれらの木々の葉が、烈しい眞夏の晝の炎熱から放れて、夕風に笑ふが如くに搖るゝのを茫然と眺めてゐる時、玄關に威勢の好い郵便配達の聲がして一通の封書が投げ込まれた。それは待ちに

待つた松原の消息で然も彼の肉筆で可なりな量であつた。私の心は病みながら是丈の努力をした彼の身の上が讀まない前に惡い豫感で充たされた。半紙十四枚に彼の細微な筆が私の心を曇らすのみであつた――十日間の後、結果が知れるといふは只の氣安めであつたこと。手術が既に手遲れであつたこと、死の宣告を受けたこと、死に對する自分の準備、家族四人に對する死後の處置などが細大洩さず書いてあつた。私は死を控へて病體が俥を驅つて家族の爲めに上長を訪ね歩いたと記されたのを見た時涙なしではゐられなかつた。

『宮川君、僕は自分の病氣に對して醫師の云ふ如く手後れしたとは思はない、僕は何等かの病氣であると意識した時、直にA病院のS醫學士に診察を乞ふた。それでも不安な爲めM病院のN學士にも見せた。若し手後れと云へば醫師の方ではないか僕は只手後れと云ふ妥協的な便利な言葉で僕の生命を葬ることが殘念で堪まらない。醫術の進歩といふものゝ内容が疑はれるではないか。

喘息をさへ癒し得ない醫師を罵り通したモリエエルが偲ばれる……』

私は松原の手紙に共鳴しないではゐられなかつた。人間は死を怖れることから、藥を――醫師を――宗教を作つた。否、總ての努力は歸納する所死に對する準備と認めらるゝ、死を覺悟しつゝ怖れる人間はその生命の永しへに續かんことを希つて昔からあらゆる苦心をした。秦の始皇は不老不死の藥を求めることが出來ずに死んだ。大隈侯は百二十五歳の壽命を願つてゐるではないか、近代科學の力が空中を征服し海底を自由にした所で人間の生命の延長すべき機械は發明しられない。私達は醫術の進歩を明らかに認めてゐる。然しその進歩は何處迄進んでゐるのか、蛙の血液循環は研究され宮入貝の寄生虫が發見せられて結果は何んとなつたか。人間の醫師の中に何れだけ適確に病氣を診察する力がある人があるか。藥といふ物が何れ丈有効であるか。技術も藥も死に對しては直に効力が現はれるが生の延長に何の權成もない。私達は只氣安めの爲めに手當を受けてゐるに過ぎないのだ。運よく難病や大怪我から逓れ運惡く死

んでも畢竟人生五十年の範圍ではないか、私達はこの人生五十年の壽命を如何にすることも出來ない私は多數の博士學士に診斷を受けながら手後れといふ事實の下に永遠に赴く松原が氣の毎に思れた。そしてその氣の毒は又私自身をも取り卷いてゐた。私の頭の何處かで聲がする。

『人間の生活は詮じ詰めた所無意味だ、其の生存は動物としての進化の過程にあるのみだ。科學も宗教も藝術もその進化の陰影だ』と。

二

その晩私は夜行列車でAに向つた。私は先での疲勞を豫期して汽車の中で充分睡眠を取つて置かうと思つたが、松原の過去や取り亂した妻君の姿やらが頭に上つて、夜が深けるに從けて妙に頭が冴へて來た。丁度松原がM病院で手術後死を宣告しられてから五ヶ月目に當つた。朝から雪もよひであつたが、吹く風に交つて××で乘り換へる頃からちら〳〵と粉のやうな雪が降り初めた。昂奮した頭を汽車の窓に倚せてゐると列車が停る度毎に停車場の灯が凍つた窓に淡く映つた。私は無聊になると服のポケット裡にある『マツバラキトク』の電報を取り出して眺めた。

『僕の地方では昔から餘計な子は產婆の處分する習慣であつた。富裕でない家の七人目に產れた僕は矢張兩親から厄介に思はれた一人で一時間餘りの時が僕を此の世の物とした。それは七つの歳迄慈んで呉れた祖母の御蔭だつた。然し今となれば僕は寧ろ世間的な愛を呪はしく思ふ。そして生活の肯定の爲めに定められたる犧牲者として暗から暗に葬られた方が幸福だつた。僕は成年になつてこの話を或親類の者から笑ひ話に聞かされたけれども戰慄するほどの愕きはしなかつた。それは親の愛情といふものも結局利己的であると解釋してゐたから。產れると直ちに斯うした運命を擔つた僕は嘗て生の歡喜を覺えたことがない。』

或る日の松原の深刻な述懷が頭を駈け廻つたりした。

ほの〳〵と夜が明け初めた頃十四時間の旅が終りに近づいた。雪も何時しか止んで

朝靄に包まれた安東市街の彼方に有名な鐵橋が見えて鴨綠江の凍つた偉大な姿が私の旅情を唆つた。安東停車場のブフェットで簡單な朝食時をすまして直にA病院に俥を飛ばした嘗て訪ねた安東市街もその日は目新しかつた。三號病棟。それに松原は這入つてゐた。大玄關で小使に敎はつた通り木院の邊りを廻つてその病棟に來た。定めし重症患者のみの病室であらう——靴を拔ぎ〳〵氷割る音を聞いた。

室は直ぐ取付きであつた。私は心持ち胸騷ぎを感じながらドアーを叩くと中で聞き馴れた妻君の聲がしたドアーの鳥渡した不快な響きの後、私には立ちながら東向きになつて板敷に寢てゐる松原の姿が見えた。

『これがこの世の人間の姿であらふか』

それが直感であつた。妻君にもそこ〳〵に挨拶して病床に近づいた。落ち窪むだけ窪んだ眼、痩せこけた頰、にぶ紫の唇、私は言葉もなく重い氣持になつて病褥の姿を眺めた。だらりと夜具の上に置かれた腕には注射の數多い跡が、痛ましく見られた。

軈て病人は苦しいと叫びながら、注射をと妻君に手模樣した。

『貴方、今ね看護婦さんにバントポンをお頼みして置きました。それからね、今宮川さんが見えましたよ』

妻君は病人の耳元に口を寄せながら云つた。細く開かれた、どんより濁つた眼が、私の見舞に對する感謝で、二三度輕く左右に振つた手が死を覺悟した言葉であつた。それから再び妻君は病人の耳元に口をよせて『ね、これで好いでせう』と丸盆に盛つた餅菓子を病人に示した。松原はぢいと凝視しながら、輕く肯いて滿足を示した。親しい友達、或は上長には失禮のないやう、その人の嗜好に應じて持成さねば氣に入らなかつた。私は松原が死に頻しつゝも、かうした几帳面な態度をすることが涙ぐましく思はれた。

この重體になつて三週日目になると妻君が云つた。後頭、臂、臀部には床擦を防ぐ卷き輪が置れた。

私は時々涸いてゆく彼の口唇を、筆で水を浸した。終日病室には折々の病人の苦痛を叫ぶ呻き聲を憂ひながら、ぽそ〳〵と前後のことを語り合ふ人々の聲とが、悲しい音樂のやうに響いた。彼の姉さんや、その良人、知己の女教師及び私等が交り〳〵彼の枕邊に座つた。醫師も手を放し周圍のものも明らめてゐるので、たゞその死の到るを待つばかりであつた。

『心臟が大變お強うございますのでね』

或る看護婦は小聲で周圍の者にかう囁いた。私の頭には松原が頑丈な恰好をして、菜園に親しんでゐた或日の姿が浮んだ。然しその夕方彼の病の苦痛から遁れる斷末魔が來た。午後から苦しいと叫ぶ聲が、次第に減つて來たと思つてゐる內に、呼吸が減じて來た。病室內の空氣も自づと重く濕つて來た。

――六時二十三分。脈搏を取つてゐた看護婦は

『只今でございます』

と氣の毒さうに振り向いた。きつと結んだ松原の顏には、何の苦痛をも窺れはなかつた。當直醫師が一通り檢死をして

『どうもお氣の毒樣でした』

と聽診器をしまつて室を去つた後、女達の嗚咽が聞え始めた。

私は暫くの後、妻君を別室に呼んで前後の話をした。

『私達のことは皆さんの御同情で、向後どうやら喰べて行けるやうに片づきました。然し差詰葬式は如何したものでございませうね。本人は暮々も解剖して呉れと申遺しましたが。

『えゝ』私が不審な顏をすると、それは斯樣ですと妻君は更に言葉を續けた。

『僕はS先生が最初誤診したからとて怨むのぢやない、誤診は至る所さうであつた。畢竟は胃癌なるものゝ研究の不足が齎らした結果であるから、死後は是非解剖して貰つて、――胃癌とは斯ういふものだ――と諸先生の參考の料となれば本望だ。と申し

てゐました。それでそのことをS先生にお話致しますとS先生もそれは立派なお考へ醫術の爲、何れ丈貢献する所あるか分りませんと、お承諾なさいました。

そして先生はまた、斯う仰しやいました。誤診は明らかに僕の失策でした。責任は充分感じてゐるのです。それで諸費用なども研究患者として、無料に計らつておきましたし、また貴女やお子さん達の將來も及ばずながら、お力になる考へですと、御親切に仰しやいました。』

妻君は言葉を結んで夫の生前の健氣さが思はれてならぬといふ風に泣き伏した。

『あゝ、さうですか』

私は輕く答へながらも、胸の内には『松原も松原。S先生もS先生と二人の英雄的な行爲に尠からず感激してゐた。然しその感激の情は聽て私の理智に依つて拋り出されてしまつた。

『俺達はかういふ善事に感激したり或は他の惡事に對して憤慨したりして、日を送つてゐるのだ。それが生活といふのだらうか。全く人間のお芝居といふものは低級の限りだ。

私は只管人生無情の感に打たれた

――（終り）――

（大正八年六月九日作）

般若の小政

一

早七時の××列車を過した後は、次の列車までに可なりな間合があつた。驛夫の山田は助役の矢崎が列車を見送つて、驛舍に這入つた後までも呆然と何とはなしにホームに立つてゐたが、ふと眼の前の二本の軌條が今更の樣に意識に上つた。それから線路と畑とを越した向ふに、ぬつと立つてゐる禿山のふところに、朝日がぱつと映えてゐるのに氣付いた。初秋の冷々とした、然し徹夜明けの氣怠るい現身には氣持ちよい朝風が、折々に面を掠めるのが愈々意氣と元氣とを呼び起した。

『そうだ、この間合にホームの掃除をしやう』

小走りに物置に駈込んだ山田は、竹箒を持出して朝の行事たるホーム掃除を始めたしつとりと朝露に濡れたホームの土は、自分の箒の先で、綺麗に筋目立つて清められて行くのが心持よかつた。其處迄彼處迄と、心に思ひ浮べて、餘念なく箒を動かしてゐた山田は突然、自分の頰ペタを火の出るかと思ふほど、後の方から平手でなぐりつけられた。同時に手に持つた竹はうきが足の先で蹴られて一二間向ふへすつ飛んだ。

『朝つぱらから人に塵を掃きかけるなんて縁起でもねえ、氣をつけろい！』

突差に子供〳〵した聲乍ら然し鋭い怒號が響いた。山田は前後の思慮もなく拳をかためて振り向いたが、其處には都合では今一叩きと、膨くれ面した十八九の青年が手をひろげてゐた。

山田はその若者が誰であるかが稻妻の樣に腦裡にひらめいた時、苦い顏したまゝ握つた拳を解いた。

『ほんとに氣をつけねえ、朝つぱらから』

若者はかう繰り返して歩みを移し出した。

丁度その時助役の矢崎は洗面を濟して椅子に腰を下した時、黄ろいど號が耳には入

つた。矢崎はホームに飛び出すや否や横合から若者を投ぐり倒して、二度三度足蹴にした。

『驛の構内を無斷で通りながら、人の仕事に邪間をしたり、因緣をつけたり手前こそ氣をつけろ、おまけに青二才のくせに、三十男に手を掛けるなんて太てえ奴だ!!』

若者が辛じて起上ると、矢崎の大きな平手が又若者の一方の頰に行つた。

『痛い！　俺を酷い目に會したな、よし、覺えてゐろ。』

若者は恨めしさうにして、矢崎を睨めながら、かう捨臺詞を云つて駈け出した。

どうなることかと、ぶる〳〵震へてゐた山田は、若者の姿が見えなくなると漸く口を開いた。

『助役さん、貴方はえらいものを叩きなさつた。彼奴は安奉線はおろか、內地でも名のある般若の小政の乾分ですせ、後で何ともなけりやようがすがねえ。』

『般若だらうと、鬼面だらうと、擲つた後は仕方がないじやないか。一體あゝやつて威張らしとくと世間によろしくない、少しは懲しとくのもよい。』

矢崎はかう云つたものゝ、若者の薄氣味惡い捨臺詞を思ひ起すと、流石に好い氣持はしなかつた。

二

その日の午後の三時頃だつたらうか、徹夜疲れの晝寢から眼覺めた矢崎は、やつとものをいふ四つの娘をあやしながら、長火鉢に凭れて澁茶を啜つてゐる時だつた。

驛夫の一人が慌しく青い顏をして飛び込んで來た。矢崎は驛夫の姿を見ると『本統にやつて來たな』との豫感がさつと全身を迸つた。同時に一種の緊張味にどうにかなるだらうとの捨鉢な氣分も交つて、心を落ちつけた。

『助役さん、大變です。般若の小政が助役さんに會ひたいつて、乾分を二三人連れて驛に來てゐます。驛長さんも困つてゐますから、直に來て下さい。』

『……』

『驛長さんも事を穏かにつて、親方を宥めてるんですが、助役さんに會はなきや、歸れねえつて聞かないんです』

『さうか、よし、よし、今行くからね』

矢崎はわざと寢間着の丹前のまゝ、帶を締め直した。

『貴郎、何事か起つたんですか』

『いゝや、お前たちに心配かけるこつちやあない』

妻の不安げな尋ねに、かう云つてぶらりと程近い驛舍へと宿舍を出た。

矢崎はある衝動を感じながら、驛舍のドーアを威勢よく引き明けると、無言のまゝ驛長と頬に傷あとだらけの、不氣味な男とが對座して、其の廻りにはこれも無言のまゝ、今の事件が如何に展開するかを待ち受け顔の乾分らしい三人が突立ち、猶、一隅に擔架に毛布を覆ふた死體のやうなものが置いてある。暗默の中に複雜な意味が爆發しやうとする一瞬前の嚴肅な狀景にぶつ突かつた。

『やあ、驛長さん御厄介かけてすみません』

彼は一言驛長に挨拶すると、その返事も待たないで相手の男に口を切つた。

『僕が矢崎だが、會ひたいつて甚麼用事ですか』

『あ、あんさんが助役さんで、手前は通稱般若の小政つてけちな野郎なんですが、とうぞお見知りを願ひやす……。』

小政は鳥渡言葉を切つて、世辭笑ひをしい〳〵氣味惡く丹前姿の相手の樣子を見ながら、又口を開いた。

『用事つて、外でもねえんですが、今朝あつしの内の若い者が、大變助役さんにお手數をかけたさうで、まあ、あゝ云ふ風に弱り切つてゐるんですが、本人も罪もねえ人を、擲つたりして大きに惡かつた、自分が酷い目にされたのも無理はねえが、一層のこと序に助役さんの手で片づけて貰ひたいと云ふんです。あつしも乾分が、痛え〳〵つてうなつてるのは、不憐でもあり又氣持も好かあねえから、本人の云ふ通りあんさ

んの手で止をさして頂かうと、かうして怪我人を擔架で持つて來た譯ですが、如何ですかい、あつさりとあんさんの手で』

小政は淀みなく用事を話してから、馴れた手つきで腰の煙草入を出して、ぽんと音をさして煙管をぬくと、ひとわたり乾分に眼を呉れた。驛長はなまなかの仲裁も無駄であることを知つて、驛夫に目配せしながらその場を外した。

『君、そりあ本氣かい』

矢崎は自分ながら大きな聲と思ひながら、駄目を押した。

『あつしも男でさあ、洒落や冗談に人間ひとり殺しやしませんや』

『本人も覺悟してゐると云へば、望み通りにしてやるが、後で難題はないね』

『えゝ、難題なんざあ、ござんせん』

『屹度ね』

『屹度』

『お前も屹度承知か』

彼は擔架の若者にも念を押したが、白布に殆んど包まつた顔を靜かに立てに動かした。

もう彼等の要求通りにするより外そこに何等の手段も口實もなかつた。（斯うなりや、俺も罪人になるばかりだ）彼は心に堅く決心して、一隅にあつた鶴嘴に眼を向けてから、除々に腰肌をぬいて、身輕く仕度した。

何と云ふ、靜寂、何と云ふ暗默、中間驛の狹い驛舍の中はしんかんとして、その莫寂の向に大の男達が微かなる呼吸の音と、電信機の上に懸けられた、時計のセコンドの音が、ほのかに律を作つて一瞬先の物凄い狀景の序樂を奏してゐた。

身輕くなつた矢崎はもう躊躇なくビーターを掴むと擔架に跨つて、眞向から若者を見下してからビーターを上段に振り翳して胸のあたりを覗ひつけた。

——その時、觀念したやうに眼を瞑つてゐた若者はぱつと眼を開くと、今更のやう

に大きな男が、ピーターを振り翳して、今にも己の胸にその四角な、光つた金物をぶち込みそうにして構へてゐるのが、眼に這入つた。同時にその眼には眞劍な殺氣が漲つて、本氣に自分を片づけてしまう心が讀まれた。

一方矢崎はその朝、元氣よく逃出した若者が、全身繃帶にくゝまつて來る筈がないと思ひ起すと、何處までも莫迦にする彼奴等の仕業に憎惡の念が募り、憤怒の情が彌が上に湧いて、自らその形相も凄くなつてゐた。

若者はピーターが堅く握り締めらるゝのを見た——

エイッ！その掛け聲があつたらもう駄目になるのだ。何ぼ親分の云ひ付けだつて、命には代へられない。さう思ふ瞬間、頭がぐら〳〵して來た。若者は眞っ蒼になつて擔架から發作的に飛び起きて、ほどけかゝつた繃帶を引き摺り〳〵表へ逃げ出した。

矢崎は氣拔けの體でピーターを下し無言のまゝ小政へ瞳を移すと、凝乎と、今迄始終を見てゐた小政は急に立上りさま

『えい芝居が露れた。けふは日が悪い又挨拶をするっ』

と鋭く云ひ放つて不氣嫌な顏で乾分を促しながら出て行つた。

三

『あのまゝで濟す筈はない、彼奴等の性分として何とか仕返しに來るに違ひない』

小政等が歸つた後、驛長に自分の不注意からつまらない事件を引起したことを詫つて驛舍を出た矢崎は、向後の處置を思ひ〳〵宿舍に歸つた。さうして問はるゝまゝに妻にも朝の事情から委しく語つて聞かせた。

妻の咲子は炭礦の持主の子に生れた夫が、前にも甚麼もの相手に、血の雨を降らさうとした經驗が二三度あつだことに思ひ上ると、愈々不安が募つて來た。

『ねえ、會社や這麼子供のことを考へて、小政とやらへ詫を入れなすつては如何』

『莫迦！ 今更、おめ〳〵詫をいふやつがあるか。仕方がないさ、斯うなつたら身命を睹して戰ふばかりだ。』

勝氣な夫が云ひ出したら引き込めない性分を知つてゐる咲子は、たゞ泣くより外なかつた。矢崎も妻を叱つたものゝ自分がこつちへ飛出す動機となつた坑夫相手に賃金のことから、血の雨を降らさうとした事件を思ひ起してゐた。あの時も蟒の太吉とかゞ、矢崎のぽんちの見付り次第殺らしてやると云つた事に思ふと、さう脅しや何かと高を繰くつて無雜作に片づける譯には行かない。然し士族の家、炭礦主の家に生れ育つた彼は、所謂彼等仲間の『道』なるものも自然と會得して滿更の素人が恐がる樣に彼等を怖れはしなかつた。その武士の家、炭礦の家に生れたと云ふ所以でもなかつたが、自分の魁偉なる體格や容貌と趣味の上から物心づくと夏は麻の五つ紋を着、冬は黑の五つ紋に角帶の着流しといふ、直侍のやうな姿で世間の凡俗をあつと云はしてゐた。その男伊達、俠客じみた行ひは、ひと通りの世間のものとなつたこの頃でも、折々現はれるのだつた。

『月給取で送るのも一生、ごろついて送るのも一生だ。まさか違へば元の趣味の生活に歸るばかりだ。それが俺の本統の生き方かも知れない』

矢崎は妻の涙を不憐に思ひながらも、來るべき爭のあとの身の振り方を考へた。

『おい咲子、愚痴云つたつて駄目、もう晩い、明日の勤務に支へるから寢やうじやないか』

彼は物靜かにさう云つて廁に行つた。廁の小窓から外を覗けば漆黑の暗、彼處の叢此處の木立の闇に、命とばしき秋の虫が、聲を限りにビビ、ビビと啼いてゐた。

△　△　△

どろ〳〵と目蕩んだと思ふと頻りに玄關を叮くものがあつた。矢崎は素破と本能的に飛び起きた。同時に眼を覺した妻を――靜かに――と制して、洋燈をつけ、何か得物をと見廻したが恰好のものも見當らなかつた。仕方なしに炊事場から出刄庖丁を持つて來るとその柄を手拭でくる〳〵に捲いてから、自分の敷布團を鮮卷にしそれに帶をさした。

矢崎は忍び足で玄關の戸に添ひ、外の樣子に耳を澄した。

『今晩は――ご免、小政の身内です、鳥渡此處開けなすつて下さい』

彼の耳の傍で、乾分の一人らしいものゝ聲がした。彼はじいつと心を落ちつけてから大きな聲で呶鳴つた。

『小政の身内つて、今頃何だい。用事なら明日にして貰いたいが、それとも小政もそこに來てゐるか』

『えゝ、來てゐます』

乾分は矢崎のかまに掛つて、うつかり小政のゐることを返事したので『馬鹿野郎』と小政に小聲で叱られてゐた。同時にその聲の見當で小政の居り場所が分つた。

『よし！　今、開けるよ』

矢崎はかう返事すると、靜かに靜かに戸を開けてから突然鮮卷の夜具を放り出した。

蒲團を矢崎だと思つた乾分達は、直に拔身のドスで切り付けた。暗にもドスが二本三本と瞬間に眼に光つた。その隙を覗つて素早く飛び出した彼は、出刀を逆手に持つた儘、小政の後ろから襟筋を掴むと、柄の細い小政は大きな矢崎にぶら下げられた恰好になつた。

『小政！　この矢崎勇次を見損ふなつたかっ！』

がんとする程の大きな聲を耳元に聞いた小政は、突然がらりと白刀を投げ出した。

四

『全く兄弟の膽つ玉には感心したよ』

その翌日の非番には、何事もなかつたかのやうにけろりとして、酒肴を提げて宿舍に押しかけた小政は、その般若と仇名された醜い顏に人の善い笑みを浮べながら云つた。

それから後は矢崎を『兄弟々々』と呼んでは休みの日と謂はず勤めの日も構はず押しかけて來た。四つの娘の兒さえ姑めは恐ろしい顏に泣き面したが、伯父さん々々と云つて馴付いて來た。小政は『嬢々々』と呼んでは家に來ると膝から下さなかつた。

『兄弟、俺がこの土地にゐる中には、どんな事があつたつて、兄弟の家や、兄弟の勤めてゐる驛には、これつぱかしも他人に指をさゝせねえからな、それだけは安心しねえよ』

或時に小政は節立つた小指の先を示して、こんなことを云つたりした。然し無智と云はうか、無邪氣と云はうか、誰彼の前で『兄弟々々』と呼ばるゝには流石に矢崎は弱つた。

『ありや、兄弟の親分かい』

――所長を掴まへては、親分と呼んで、矢崎の男なりを賞めて所長に苦笑ひをさしたりした。

事件後、一ヶ月も過ぎた頃だつたらうか、小政に愛せられて居た四つの子が、激しく腸を煩つて、醫者も遂に匙を投げ出した時、小政はわざ〳〵大阪の――天滿宮の御供への餅を電報で取り寄せて、これで屹度嬢の命を取戻すと力んだりした。どうせ醫

師に見捨てられたものではあつたし、小政の親切のまゝ、天滿宮の餅をたべさしたのだつたが、その翌日の夕方遂に逝くなつた。小政は『嬢が死んだ〳〵〳〵』と繰り返しては死兒の面に覆ふたガーゼを取つては、涙をぼろ〳〵流しながら名殘りを惜しんだ。

骨拾ひの日は朝から押しかけて來た。

『兄弟、今日は俺は誕生日で、嬢の骨拾ひに行かれねえから、今朝早く嬶と、嬢の變つた姿だけ見て來た。然し兄弟も骨拾ひが濟んだら俺の誕生だけは祝ひに來て呉れよ待つたゐるからな』

それから間もなく矢崎は二三の親しいものと、程近い野邊の急造りの火葬場に娘の骨拾ひに出かけたが、それらしい處から蒙々と野火の煙りかと思はれるものが立ち上つてゐるのを見た。

『何だらう』

『何だらうな』

顔を見合して口々に怪しみながら近づいて見ると、それは子供の遺骸の周圍に隈なく何十把となく立てられた支那線香の煙であつた。

矢崎はこれを見ると子供のこと――よりも、小政の情誼――愛しいものを惜しむの美しい心が偲ばれて、感激の涙が止め度もなく流れ出た。――あのいけ太い芝居を仕組んだ小政、自分の命を覗つて暗に白刃を閃めかした般若の小政に、かうした豊かな人情美があつたかと思へば、全く涙なしではゐられなかつた。

矢崎はその場から、骨箱を抱いた儘で小政の家を訪れた。

『兄弟、嬢はたつた是丈になつたのかい、これ丈に』

小政は矢崎の姿を見ると挨拶もしないで突つ立つてゐたが、生前の愛らしい子供の事を思ひ起したのか、その傷痕だらけの顔にぽとり〳〵と涙をこぼして、眼たゝきもせずに小さい骨箱を瞶めた。

（完）

――一九二三、二、五日夜作――

ルビーの指輪

一

ひと風呂浴びて、綺麗に頭の毛を梳つてからさつぱりした氣持になつた繁吉は、恍惚と、獨身宿舎の自分の室の窓から往來の人を眺めてゐると、路傍の電柱の街燈に電氣が點いてゐるのに氣がついた。殆んど無意識に自分の室の電燈に眼を向けるとこれにぽつかりと電氣が來てゐた。別に不思議なことでもなかつたが、放心してゐたのが急に現實に引き戻されて、一寸得體の知れない淋しさが身内を横ぎつた。――（詰まらないなあ）――それは赤ん坊が逢魔時に泣き出す淋しさだ。――（詰まらないなあ――心の中に二度ほど繰り返してから靜かに机の抽斗から朝日を一本出して火をつけた。ふと寮臺の壁に張りつけたミレーの『祈り』の版畫が眼に入つた。廣い野原で百姓の夫婦らしいのが、鍬を置いて教會の鐘の音を聞きながら靜かに祈つてゐる畫だ。

あの繪を張つた時は尠くも純眞と、敬虔と、謙讓な心持ちであつたが、さうした愼ましい心がこの頃だん〳〵と薄くなつてゆくのが今更のやうに意識せられた。臆病の自分がやつとの思ひで捕へた彼の女との戀、谷口京子との戀が破れてから心が崩れて來たやうだ。彼の女の心をひくまで、いや彼の女と病院の白いベットの上で、大勢の患者の眼を偷みながら戀を語つたり、見舞に來た彼の女を廊下に送つて小暗い廻り角でちよつとキッスしたり、彼の女が見舞の造花を診察臺に置いてから一方の手で素早く蒲團の下に長い〳〵樂しい語り草を隱して歸つたりした時……迄の頃はあのミレーの繪を張つた心持ちと同じ意味ではないが、虔ましい童貞の淸さを持つてゐたんだ病氣が癒つて退院すると彼の女は、急に一切を忘れてしまつた。丸で玉子の淡雪を食つたやうなものだ。夢なら獏に食はせる比喩もあるが。莫迦々々しくて親しい友達にさへそれを明かされなかつた有樣だ。一體何の原因でけろりと自分を袖にしたものだか、僕でさへ分らない。京子は單に戀の眞似がしてみたかつたのだらうか。自分はやつと憧憬した戀といふものにぶつつかつたとの喜悅を、さんざんに蹂躙されて、それから眞劍に女を戀することの莫迦らしさを感じて來た。

その後京子……××會社歸り（彼の女は××會社の事務員だつた）の彼の女には二三度電車の中で遇つたが、どうしてあんなに澄まされるかと思ふほど知らぬ顏を極めてゐた。

或日には甘つたるい娼婦の手紙のやうな、あの澤山な文殼を電車の中で擲げつけてやらうかとさへ思つたことがあつた。

繁吉は何か大事な事でも思索してゐるかのやうに、茫然と葉煙草の灰が机に散るのも知らないで、この頃の心の荒んで來た動機を考へてゐたが、强ち彼の女ばかりの罪ではない獨身生活の單純さと、抑さへ切れない性慾の遣場に惑つての狂ひだと考へ直して、又（なあんだ詰まらない!!）と心に發し乍、薄苦笑ひをして更めて室內を見廻はした。（うむ矢張りあの繪は好い、氣の利いた額緣を誂發してやらう）繁吉は急に噪

いだ氣持になつて元氣好くドアーをおして食堂に這入つた。

二

『どうしたい、遲いぢやないか戸田君。』

『何ね可いこと考へてゐたんさ、夕ぐれがくるとどうも、センチメンタルになるんでね……。』

繁吉は景氣好く答へ乍ら友達の池見の隣りの空椅子に腰を下した。

『おい、倆や、飯にお調子一本だよ』。

『お調子一本は景氣が好いぢやないか、ほんとにどうしたい、夕暮に過去の戀を思ふかね……。』

『まさか……。』

星を刺された繁吉は照れ隱くしにお膳が來たのを幸ひに盃を手にした。

『池見君、一杯附き合はんか。』

『もう止さう、飯食つてからぢやまずいや』。

『でも一杯やつて今晩町へゆかうや。』

『お生憎樣だ、今夜は先口が掛つてゐる。例のほれ、出張報告の整理だ。まあ緩くりやり給へ。』

池見は繁吉の肩を輕く叩いて座を立つた。

廣い食堂に取り殘されたやうに、しよんぼりと夕食を濟ました繁吉は、一本の酒にほろりと醉い心地を感じ乍ら淡い孤獨の寂寥を感じて、急に人懷かしい思ひの丈誰かに甘へて見たい遣瀨ない感じが起つた。

宿舍を飛び出して見ると、表は流石に初夏の雰圍氣が漲つて、町の軒並に、街路樹に灯の色に、往來の人に生氣が溢れて自ら憂鬱の氣が散じてしまつた。繁吉は一丁羅の銘仙の單衣に絽を羽織つて、買立ての麥藁帽子を頂き、靜かに氣取つて舗道を歩いた。

宵のN町は毎時のやうに夜店が並んで、街の兩側は咽せ返るほどの、人ごみであつた。その人ごみを縫ふやうにして歩いてゐる中にも、若い美しい女と行き合ふことは樂しみの一つだつた。

人ごみの中で味ふ女の香、髪毛の香、香水のにほひ、ほのかな女のかほり——。それが如何に無關心にしてゐても、若い男の心を掴まないではゐなかつた。さなきだに女……の香に飢えてゐる繁吉には、メソヒストになつたのではないかと、思はれるほど女の匂を貪り漁つた。その人の知れない愉悅の中に過去の女、京子のことや、會社の女事務員……交換手……知り邊の妻君……自分の知る範圍の女の感じや、噂やロマンスを手繰つてゐた。女の襟筋……鬢の毛……瞳……腕下から太股への曲線美。斯う想像を逞ふして來ると、ゆきづりの女の香を嗅ぐ位の刺戟では堪えられなくなつて來た。その優しい丸ろやかな音樂的な、聲音を聞かないではゐられなくなつて來た（然し、然しと云つて何處へ……）心の中さでさぐつて見たが、簡易に今の望みを果

されさうな宛もなかつた。だとて廓へひとりで俥を飛ばす勇氣は、若い彼には到底出來ない藝だつた。……さうだ、××軒カフエーへ……やつと思ひついたと嘗て一度行つた××軒へ足を向けた。

I町の小暗い舗道からN廣場の活動寫眞館のイルミネーションを眺め乍ら心を躍らして歩みを早めた。繁吉は一寸の逡巡の目的のN廣場横の××軒のレーン張りのドアーを開けた。

『入らつしや——い。』

女中の甲高い聲にやゝど膽をぬかれ氣味で、瀟洒な一間に案内せられて、定めの卓子に着くと照れ隠しに直ぐにメニューを握つてながめた。

『何に致しませう』

突然若い女の聲が後ろに聞こえたので、慌てゝメニューを伏せて振り向くと、寶塚歌劇女優タイプの綺麗な女が心持ち笑みを含み乍ら立つてゐた。

『ビールと何かね……。』

女が思つたより別嬪だつたのに、聊か面喰らひ氣味で、註文してから更めて間うちを見廻はすと、この前冬に來た時と見違へるほど綺麗になつて、飾り付けなども氣が利いて如何にもカフエーらしくなつてゐるのが、嬉しかつた。室のまん中の衝立の向ふにも客がゐる氣色がした。

女は直ぐに註文のものを持つて來た。

『さあお酌しますわ。』

ビールの栓をピンと刎ねてから、馴れた手附でカットグラスのこつぷに景氣よく盛つた。ビールをつぐ隙に女を注視すると、白いエプロンの胸には薄紫の七寶の丸いボタンに3と數字が書いてあつた。

『貴方はお久し振りね、偶には入らしつても好いわ。』

『君は僕を覺えてゐるのかい、たつた一度來た僕を。』

繁吉はこの女があてすつぽうに云ふのではないかと、疑ひ乍ら吃驚した恰好で、尋ねると女は吹き出してしまつた。

『覺えてゐるかつて情けないわ、そりや商賣ですもの殊にねえ……。』

『殊に何だい、君はあの頃もゐたのかな。』

その頃のことを思ひ起して見たが、この女がゐたとは思ひ出せなかつた。

『まあひどい方、妾だつて女の中に入れて頂戴よ、貴方みたいな若い方に忘れられるやうぢやほんとに泣きたくなるわ、尤もお婆さんには違ひないけどねえ……おほほ、ほ、……。』

女はかう云つて魅力に滿ちた視線を投げかけた。

繁吉はたつた一度の通り客の自分を女が忘れてゐなかつたことゝ、さつきの（殊にねえ……）が氣になるやら、嬉しいやらで、云ひ知れぬ快感がビールの醉と共に上つて來た。

『僕は嬉しい、嘘にでも君が見覺えてゐたことは全くうれしい。』
『まあ貴方も隨分疑り深いのね、ぢやほんとのことを證明しませうか、あの時、貴方はマントを着て、お召物に飛白の上下でしたでせうがねえ、これでも嘘えゝ？。』
『いや降參々々、あの時どうして君のやうな天女を記憶に止めなかつたらう。』
『何れ、ほかの美しい方のことで胸が一杯だつたのでせうよ。』
『まさか、では更めて君に一杯いこう。』
『えゝ頂きますわ。』
繁吉が瓶に手をかけると衝立ての向ふで男の聲がした。
『おい、やり切れないよ、そこでそんなにいちやいちやしちや、こゝでも若いのがひとりぼつちでゐるからね。』
『まあ貴方も妬かないで、大人しくしてゐらつしやいよ、』
『莫迦、これがやかずに居られやうか——だ。』

『なあんだ、池見君か、君もひどいな、出張報告整理なんか云つて、僕を卷いてしまつて。』
『氣がくさ〳〵するもんだから、飛び出して來たんだ。だが、君等はばかに乙にからんでゐるぢやないか。』
『よせ、冷やかすな、然し僕は今お聞きの通りこのナンバー三の君を見忘れてゐたことを終生の恨事としてゐる。』
『うむこの冬だとすると、君が退院後で京子の君の失戀事件でくさ〳〵時代だから無理もないよ。』
『それご覽なさい、矢張り美しい方の問題だつたでせう、この性惡る!!。』
女は一寸言葉をくぎして、繁吉の脊をぽんと叩いてからビールの代りを取りに行つた。
『さあ戸田、今晩の勘定は君の奢りだ。』

『オーライ。』

繁吉はかう氣嫌よく返事して、テーブルの玻璃皿に盛つた葉卷に火をつけた。紫の煙りがずうつと渦を卷いて天井へ上つて行つた。暫時と切れた話の間の靜けさに、軒先の舗道を歩く人の足音も輕るい音樂のやうに心地好く響いて來た。

『貴方お二人とも會社にお勤め。』

『まあそこいらにしとくさ、戸籍調べはよそうよ。』

女のあらたまつた、問に池見は微笑しい〳〵返事した。

『でもお近づきがかうして出會ふなんて、不思議ですわ。』

『だから惡るいことは出來ないよ。』

『まあ、お口の惡い、池見さん怒つてゐらつしやるの。』

『君はもう僕の名を覺えてゐたのかい、戸田を見覺えてゐたと云ひ、僕の名を覺えることゝ云ひ、頭腦明晰のやうでさて恐ろしい。』

『ほんとに貴方はひどいのね、妾をすつかり妖婦のやうにしてしまつてさ、貴方があんまり妾を虐めるもんだからこちらが悄氣てよ。』

『おうや、おやお安くないね。御馳走樣だこと、おい戸田何とか云はんか。』

『心、心にあらずだ。』

『こりや溜らん、吾輩退却。』

池見が帽子を被りにかゝると、繁吉も續いて立ち上つた。そして默つて女の手に五圓紙幣を握らした。

××軒を出ると二人は肩を双べ乍ら、別々なことを考へ乍ら歩いてゐた。池見は女が一筋者でないことを考へた。繁吉は出がけに女が……（近い中に是非ね）……とさゝやいて輕く腰のあたりを爪捻つたことを思ひだして、樂しい微笑を洩らし〳〵歩いた。

繁吉は宿舍の寢床に這入つてからも妙に女のことが氣になつて、亢奮して寢れなかつた。尠くも女が自分を、忘れてゐなかつたといふことは、どの點から考へてもうれしく思はないではゐられなかつた。

冬から夏へ、その永い間を女が自分を忘れずに胸に秘めてゐたんだ。それにしてもあの妖艶な女を自分が記憶してゐなかつたことは、正に谷口に起因したのかも知れないさて今夜こそ、N町での願ひ、女の匂ひ、女の聲を飽くまでに、享樂することが出來た。然もその女はこの自分を想つてゐて呉れた女だ。美しい女だ。あのテーブルに腰を下した時、女の眼の奇しい喜悅の輝きはどうした。あのチャーミングの一瞥はどうだ。あの美しい髮、襟筋、面長な顏立、凉しい眼、ばら色のしまつた口、すつきりした鼻はどうだ。殊に首から肩へかけての、線の美しさはどうだ。思ひ出してもぞく〳〵する、(俺はどうしても彼の女を摑まねばならぬ)轉輾しても次ぎ〳〵に樂しい空想が愈々頭を確然と澄ましてきた。

繁吉はその日の仕事が何時になく、片ずくのがうれしかつた。同時に心ひそかに夜の計畫をも立てゝゐた。

池見の目を何がなしに怖れた彼は、夜のくるのを待つてそつと、宿舍の小使室の小門から町へ出た。時計を見るとまだ七時過ぎたばかり、暫しの隙つぶしを又N町に送つた。露店の品物も、行き交ふ女の顏も、もう問題でなかつた、只時の立つのが待ち遠しかつた。

××軒の前にきた時店が隙なのか、女は軒に立つて通りを眺めてゐた。

『今晩は』

繁吉は女に挨拶し乍ら、思はせ振りに通り過ぎやうとしたが、女は繁吉の袖を素早くつかまへた。

『まあ素通り、一寸と位好いでせう。』

『あまり日參も外聞が惡いからね。』

『思はせ振りなんかして人が悪るいね、こちらへお這入りなさいよ。』

女は繁吉をおし乍ら狹い別室に案内した。

『こゝね、好い室でせう、小綺麗で、この顏知つてゝ、聖盃物語のエレン姫よ、失戀のエレンが屍骸となつて、白鳥の船に乘せられ啞の老人に守られ乍ら、湖水を渡るところ、ね、好い繪でせう、この室と適はしいわね。』

かう女は一氣に喋つてドアをしめて出て行つた。うす靑い佛蘭西風の裝飾紙で張られた壁に、金緣の額はぽつかりと浮いて、白鳥の船が靜かな湖水を渡つてゐる樣な全く感じが好かつた。

『君は中々詩的なローマンスを知つゐるんだね。』

『そりやお仕込がね。』

彼の女はビールを突出しの皿物を卓子に置きながら、一寸とコケチッシュな嬌態を作つて答へた。

『では僕はその又仕込を受けるわけかね。』

『これは手きつい、前言取消し、さ仲直りに冷いところを一杯ね。』

冷たいビールがすつと心よく胃の腑まで落ちつくのが知れるほどの旨さを感じながら、繁吉は女の仕草をしげ〳〵と凝視めた。一體どんな氣持で、自分を取扱つてるゐかが疑はれた。

『芳子さんお樂しみ、それ、キッス代五拾錢。』

外のウェートレスが行きづりに、立つた一つの小さい窓をぴつしやりと締めて往つた。まだ何處かに乳氣の失せない彼はこの露骨な惡戲に、思はず顏が赤くなる氣がした。

『まあお瀧さんも隨分ね』

『……』

『莫迦に粹を利かす人だね この家では、この手で若い者を誑かすんだね、おゝ怖わい』

『まさか狐ぢやあるまいし、お瀧さんちよい〳〵あんな惡戯をして困りますわ』
『でも若し好い人であつたら、願つたり叶つたりの、××が出來るぢやないか、その賜物かな君の白い指に嵌まつてゐる澤山な指輪は？』
繁吉は女の手の指環の數をヒイフウと勘定しながら云つた。
『えゝ、何とでも仰しやい、妾に好い人なんかあつたらカフエーのウエトレスなどにならなくてよ。この中に一つだつて惜しいと思ふものはないわ』
『ぢや僕に一つ呉れるかい。』
『えゝ、上げますとも、お望みのまゝ』
『ほんとかい、ぢや君の心臟の血を表象した中指のルビーを貰らうかね。』
『これ？』
女は惜氣もなく指から拔いて手渡しゝた。
『貴方だつて好く似付くわ、……ちよつと貴方お幾つ、妾の方がお婆さんだわね』

うち見たところ二十歳前後であるが、ぢつと視詰てゐると何處かに暗い影が見えた二十二三であらう、ひよつとすると俺が若いかと繁吉は思つた。
彼はかうしてだん〳〵女と接近して行つたが、ちよい〳〵と惱ましい程の秋波や羞耻やらを見せて、充分に男の心をひきつけながら、さて容易に鍵を渡す氣勢が見えなかつた。――（一體俺はこの女に何を求めやうとしてゐるのか）……女と向き合ひつゝも眞劍にこんなことを考へないでは居られなかつた。
その夜繁吉は別れ際に女と握手を交はしたばかりで、物忘れの形で冷たい宿舍に歸つたが、ふと指にはめたルビーの指輪に氣付くと慄然として、幸福に醉はないではゐられなかつた。
……早い話が所も名も碌に分らない者にどうして、女の大事な指輪を渡すものか、見たところで二十圓やそこらの價値あるものだ。それを平氣で渡すなんて、矢張り俺を俺を……。

繁吉は女を試す氣でそれから四五日足を向けなかつたが、可なりな間を置いて行つても女は指輪のことなんか曖にも出さなかつた。かうして彼は女の魅惑に引きこまれて、何物かを慾救しながら足繁くなつた。

女は全くの處女のやうに繁吉を迎へた。その齎らす言葉の密のやうな甘さ、意味の深さ、自然女の一言一句、動作の一擧一動は堅く彼の心を摑まへて、樂しい空想に醉はないではゐられなかつた。（ではこれでお釣りは君にあげるよ）（あら、そんな無駄をするもんぢやないわ）彼の歸り途には几帳面に釣り錢が渡された。

繁吉はその女の意氣に感せないではゐられなかつた。會社員とカフエーの女。それは餘りに有り觸れた情話の見出ではあるが、世の中に美しい女の心を摑んだほどの樂しさがまたとあらうか、大勢の相客の中で、手と手、眼と眼で戀を語るシーンの樂しさは誰も知るまい。

四

その夜はびしよ〳〵と小雨が降つてゐた。今晩こそは諦めやうと、好きな本を手にして見たが、頭が直に女の幻を浮かせて、文字が夢のやうに淡く淡く消えて行つた。ぢつと本を伏せて冷靜に己れを凝視しても、直に女の妖麗な形象が幻となつて囁き現はれた。

（チエッ）と舌鼓を打つた彼は半ば捨鉢のやうに帽子を取つて表に出て辻俥を呼んだ

俥の幌越しに透し見れば、地の面は心地よい程に濕つて、折々の行潦に灯火が艶めかしく映つてゐた。

もう芳子は確かに俺のものだ、貴方さへ浮氣な心でなければ、妾はどうから貴方のものです、と彼女のもてなしや表情に充分誠意が見えるではないか、もうこれまで自重したのだから今夜こそは何物かをしつかり摑まなければ、俺があまりに優柔に見えるだらう。

繁吉は女の態度を綜合して結論を心に浮かべながら俥を急がせた。さうして××軒

に俥で乘りつけることも大袈裟だからと思つて活動館の横手で車を下りた。

『今晩はお瀧さん』

送路を塞いでお瀧が何かしてゐたので繁吉は仕方なしに挨拶した。

『おや、戸田さん入らつしやい、貴方もなか〳〵實があるのね、羨しいこと』

『おい、僕が子供だと思つてあんまり冷かすものものじやないよ。』

『おや〳〵これはご挨拶、惚れて通へば千里も一里てね、這麽雨夜にお忍では少しは何とか云はれても罰もあたりますまい。』

お瀧の嫌味を聞流にして案内も待たずに毎時の狹い部屋に這入ると、芳子が茫然と椅子に凭れて何か思案げにしてゐた。

『どうした、いやにしんみりしてゐるじやないか。』

『おや入らつしやい、鳥渡ね、考へごとがあつてね、今貴方の聲を聞いたんだけれど横着してゐましたわ。』

『僕の聲を聞て急に考へ事が起つたのかい』

繁吉はその考へ事が何であるかを判斷しながら芳子の心を引いて見た。

『まあお人が惡い、妾ほんとに心配事があるの。』

『ちや、その心配少し分けて貰ふかね。』

『まさか貴方に……。』

芳子は微笑しながら惱ましい程、魅力に滿ちた眼でじつと見上げた。繁吉は女の一瞥にある烈しい衝動を感ぜずにゐられなかつた。

『さあ、紅茶でも啜りながらその話を聞いてやらうじやないか。』

『だつて、それは詰らない妾の一身上のことですもの。』

『だから尙更じやないか。』

『さう、ほんとに聞いて下さる……。』

女は言葉を切つてコック場へ行つた。

繁吉は芳子の魅惑に何物をもなかつた。屹度、彼の女の煩悶は自分に依つて解決して見せると靜かに壁の白鳥の船の繪に瞳を移した。

『今晩、お客樣は貴方で三人目よ、淋しいわ。』

『それで悄れてるのかい、好い人が來ないので。』

『まあ、また甚麼こと、何とでも仰しやい。』

ちよつと平手で叩く眞似をして片手の紅茶をのせた盆を下した。

『ねえ、戸田さん、妾みたいなものでも廓へ出たら賣れ妓になるでせうか。』

『それは大賣さ、恐らく門前市をなすだらう。』

『いやだわ、那麼に交せ返しちや、ほんとに。』

芳子は俯向いて繁吉の同情を牽くやうにエプロンの端をいぢくつた。襟筋が際だつて美しく、二三本の後れ毛を耳に挾んだ、小娘らしい所作が、溜らなく愛の憐情を起させた。

『ませつかへすのじやない、眞實の話さ、だが、君がそれほどの境遇でもあるまい。

『いえ、ほんとうですの、妾、次第によつては賣られる身ですわ、』

繁吉は女の云ひ草があまりに唐突のやうに聞こたので半ば聞き流しにしてゐたが、先刻の悄れ加減に思ひ合せると滿更嘘とばかり思へなかつた。

『さうかい、僕では話相手になるまいが、差閊へなかつたら、更めて聞かうじやないか。』

『ほんとに聞いて下さる、妾、這麼時ほんとにしんみりと話相手になる方がないのでひとりで胸を痛めてゐたが、同じ身を沈めるにしても、同情者が一人でもあつたらどれほど慰めだか知れないのにね、』

『いやに感傷的になつちやつたね、廓で男と女とが心中するのは這麼晩だね、雨の音が妙に淋しく聞こゆるね、』

『さう、妾、死ねたら死にたいわ、なんぼ親の爲だつて……。』

『何に、親の爲？』

繁吉は芳子から何日か道樂な兄の爲、かうした淪落な生活を送つてゐるこの告白を聞いたので、鳥渡聞き返して默つてしまつた。

女はそれに對し大した疑ひも挾まず話を進めた。

『實はかうですの、義理の父が道樂者で、おまけに株で大失敗をし、不義理が出來て到底やり切れない、少しでもよいから親助けに貢いで呉れと云ふのです。然し假令聊かでもカフエー女にどうしてお金が出來ませう、身賣りでもしなければねえ。』

『うむ、それはさうだね、で、一體無心の金高は何程だね。』

『えゝ僅かですの、』

『言つて見たらいゝじやないか、親がかりの青二才の僕だつて、高によつたら何とかならうじやないか、』

『まさか、貴方に、』

『いゝつて構はない、』

芳子は繁吉の顏色を見てから、上目使をして電燈の花笠のあたりを凝乎眺めた。憎らしいほどの美しい顏には何等羞耻の色がなく、水のやうな滑かな冷靜が流れてゐるのが繁吉の眼に深く映じた。

『たつた二百圓ですの——。』

『そればかり、なあんだ。その位で身を賣つて一生を代なしにするかい、』

『だつて妾には大金ですもの……。』

『よし僕が引受けた。』

繁吉は鳥渡思案した恰合をして答へた。があまりに安受け合ひの氣勢だつたので女も怪訝な面持をした。

『屹度、』

『屹度よ、』

『ぢや熱い紅茶を持つて來させうね』

女が氣を變へてかう云つて、立ち上つた時心の中で舌出ししてゐるやうな考がフト繁吉の頭を掠めた。

『さやうなら、まつ直にお歸りなさいね、』

女に斯う云はれて送り出された時はもう十一時を過ぎてゐた、人通りも尠なくなつてゐた。何とも云ひやうのない不快と不懣との氣持で、××軒の敷居を外に出るとまた女が追ひかけて來て、默つて手を握りながら歩いて活動館の横の暗闇に蒐ると、突然繁吉の肩に手を掛けて接吻をしてから逃げるやうに駈けて行つた。

繁吉は突然に女に接吻されて、丸で狐に誑された形で立ち止つて女の後を見送つたが、やがて、女の唇の冷たかつたことや、その刹那のセンエショナルな慾望で一杯になつたことやらを考へると女に對する一層の憎惡が加はつた。

『莫迦にしてゐやあがる。』

かうつぶやくと折角宿舍の方へ向けた足を、くるりと返してまた他のバーの方へ行つた。

彼は歩み〳〵自分の尊い心を何處までも蹂躙されたのが、癪にさはつてならなかつた。――第一、兄のためにカフエー生活をしてゐると云ひ乍ら、次には親の爲に身を賣るとか、株の失敗の無心が二百圓、たつた二百圓で身を賣るなんてロジックに合はぬ話さ、俺が甘いと思つて、絞る手管を廻したんだ。それにしてもあんまり念入りな欺しかただ、何ぼ俺が坊ちやん見たいでも、甚麼古い手に乘らぬさ――よし引受けたしかし急にはゆかぬ十日ばかり待てと云へば、その位はなんとかなりませうだつて虫の好い話だ。チエッ。

それから××バーで洋酒を呻つて泥醉して宿舍に歸つた時は二時を過ぎてゐたが、醉つた彼は他の迷惑をも顧みず、それでも間遠へないで池見のドアを頻りに叩いてゐた。

六

『おい、どうしたい今頃酔つぱらつて、甚麼に騒いじや側で困るせ。』
『怒つたつて構はねえ、怒る奴は連れて來い、玆に失戀の一青年ありだ。』
『まあ戸田、靜かにしろ、一體どうした。』
池見はドアに錠を下しながら、若者を撈はる樣子で物靜かに尋ねた。
『どうも斯うもない、俺は芳子に遊び物にされた。さん〳〵の思はせ振りの結果は全の無心だ、あまりにコンベンションじやないか、餘りに藝術味がないじやないか、おまけに、おまけに、無心の默目を押すために俺に後にも先にもたつた一度の接吻を送つたが、その接吻の冷たかつたこと、あゝ俺はすつかり遣られた。口惜しい、彼奴は妖婦だ、接吻で止めを刺すなんて、何處まで深刻な企計だ。』
『まあいゝ、分つた、だが、然し君はその企を看破するだけえらいんだよ、勝利者だよ。』

『ぢや戀はどうするんだい、』
『莫迦、甚麼無茶言ふな子供じやあるまいし、今夜は酔つてゐるから君に云つたつて効能が薄いが、實は俺もあの女からその洗禮を受けかゝつたのだよ、』
池見は皮肉に笑つて戸田の肩を叩いた。
『えゝ、ほんとうかい、』
『ほんとうにも何にも正味な話さ、』
『なあんだ、君は人が惡い、人が深身に這入るのを眺めてゐるんだもの、』
『だつて、人の戀路の邪間する奴は犬に喰はれて死ねばよいつてじやないか、僕は或る理解から君に一幕の戀のシーンを與へたのさ。』
『そりやあまり慘酷だぜ池見、』
かう云つて躍躍と立ち上つて一隅の藥鑵の口から水を呑み始めた。繁吉の顏には涙の痕が光つてゐた。

『よし〳〵、戀に苦勞するのも人生の花だ、さ今夜は失戀同志がこの室で寢やう、池見は戸田の手を取つて自分のベットに上着を拔がしたまゝ横へた。

七

それから一週間ばかりの後、繁吉は××軒の女よりと署名された一通の葉書を受取つた。裏にはたゞ『ルビーの指輪を小包郵便にて御送り被下度候』と二行に亙つて書いてあつた。

彼は女の葉書をくちや〳〵にして板の間に投げ捨てゝから、机の鏡に向つてのつへりした自分の顏を映した。—どうだいこの顏のまぬるいこと—かう思ひながら割合に平靜な心で横口にしたり顰めたり暫く續けてゐたが、ふと池見が室に這入つて來るのが鏡に映つたので、思はず苦笑して、そのにが笑ひの顏をも一度鏡に映してから後を向いた。

一九二二、一二、四夜作

一七

戀も知らずに

微風が吹いて、麗らかな春のやうな晩夏の午後であつた。信一は九箇月の腹を抱へてゐる妻のおちかが、朝から鹽梅が惡るいといふので、漸く誕生を過ぎて三月ばかりになる小夜子を連れて、守傍ら近郊の小川へ魚釣りに行かうと思つた。そして高等小學に通つてゐる隣りの木下の妻君の弟を誘つた。學校から歸つたばかりの一郎君は小犬が尾を振つて喜ぶやうに贊成した。そして直に裏庭へ飛び出して、溝の傍で蚯蚓を堀つて呉れた。

信一には斯うした行ひは、自分の現在のいら〳〵した、物足りない生活や、家や妻を忘れて、心の底に潜んでゐる、こどもの純な氣分が甦つて來るやうな氣がして嬉しかつた。そして青々した廣い野原を流れてゐる小川の心地よく濁つた水や、エレキ人

形のやうに躍上る魚のことを考ゆると、妙に心が躾り立つて來る。信一はあの髭の生へた、不格恰な鯰を思ひながら竿や糸の仕度を窓外でした。けれどもこの無邪氣な行ひも、樂しい空想も直にぶち壞はされてしまつた。二重硝子の小窓から何やら苦しさうな聲で、おちかが信一を呼んだ。信一は竿を抛り投げて家に這入つた。

『どうしたのだ』

『お腹が引き釣つて、痛くて仕方がありませんの、わたし、もう出來るのじやないかと思ひますわ』

『だつて、それにしては月足らずぢやないか』

『けども何だか、お腹の痛みが小夜子の生れた時とおんなじですもの、すみませんがあなた、鳥渡吉武の奥さんを呼んで來て呉れませんか』

おちかは下腹を押さへて苦しさうに、顏をしかめて云つた。信一は島渡吃驚したが其の儘、小夜子を負ふて、隣りの木下の細君に留守を頼んで、產婆を迎へに往つた。

吉武の妻君は丁度何處かへ出かけるとこらしかつたが、『まあそうですか』といつて兼ねて仕度してあるらしい風呂敷を信一に渡した。信一は『今直ぐ道具を持つて往きます』といふ妻君の甲高い聲を後ろに聞きながら戸外へ出た。信一は今度生まれるこどもに附帶したいろ〳〵の事柄を思ひ起しながら小走りに歸つて來た。

家ではおちかはもう、蒲團を敷いて寢てゐるらしかつた。そして隣りの妻君の聲で頻りと何やら慰めながら、お腹を揉んでやつてゐるらしく、おちかのうん〳〵唸つてゐるのが襖越しに信一の耳に入つた。信一は鳥渡輕るい憎惡と不安とを感じて、身の置きどころがないやうな氣がした。チョッと舌鼓を打ちながら、あがらずに庭に立つてゐると、隣りの細君は慌てゝ出て來た。

『ああ、島崎さん愈々のやうですわ、もう一遍お產婆さんを見に往つてやつて下さいまし』

信一は嫌な感じがした。あつちへ走り、こつちへ走りするのが若い男の尊嚴にかゝは

るやうに思はれた。しかしとつさの、手少ない家では自分で行くより外はなかつた。

道が違がつたのか、産婆の家には鍵が掛かつてゐた。信一が再び家に歸つて、窓から覗き込んだ時は、吉武の細君と木下の細君とが、ごた〳〵忙しそうに働いてゐた。信一はお産の時男がゐるものぢやないと聞いてゐたので、小夜子が生れた時分のやうに、その足で早速、木下さんの所へ駈け込んだ。一郎君は魚釣りがお流れになつて妙な騒動が起つたのでにや〳〵信一の顔を見て笑つてゐた。

『木下さん、今日は、御手紙書きですか』

『やあ入らつしやい』

『どうも、けふは奥様にとんだ御厄介になります』

『はゝあ、けふはどうやら御芽出たらしいですね……小夜子ちゃん、ばあ、……はい、おんぶしてぢちやんにおいで』

『ほれ、小夜子ちやん、ぢちやんにこんちは、お言ひよ』

『さ、ぢちやんにおいで』

『どうも一年にひとりづゝ出られちや全くやりきれませんよ』

『しかし子供は餘計に出來た方で好いですよ。私等みたいに四十面下げて、子がないのも見つともないばかりか、淋しくてこまります』

『ですが、私のような若さで二人の父となるのもあまり體裁のよいものでありませんね、は……』

『さよう、烏渡あとが近かつたですね。せめて、も一年間がありますとね好かつたのですが、これでは實際小夜子さんが可愛想ですよ』

信一ははつとした。今迄に小夜子が可愛想だと思はないでもなかつたが、木下さんの言葉で急に思ひ付いた樣な氣がした。この傷い氣なさまで、お姉樣になるのかと思へば、いぢらしさ可愛さが俄かにこみ上げて、小さく林檎のやうに赤くふくらんだ頰に、こゝろゆくまで頰ずりしてやりたかつた。まだ深く世間に染まない、こどもごと

もした若い信一は子供などに相手になるのが嫌であつた。そして自分の享樂に腐心してゐた。夏の夕べなどに、妻に差問へがあつたりした時、珍らしく、小夜子を抱いて門に立つて居れば、近所の口の惡い細君達は戯談半分に『まあ感心にこどもを守してゐなさるわ、あれでもすぐに二人のお父さんだからね』などゝ言つた。信一はその度毎にくすぐつたいやうな悔辱を感じた。そして慌てゝ家に這入つて妻にこどもをおしつけた。途中で若い娘に會へば自分が既に人の父であるといふのが却つて耻かしかつた。信一はまだ斯うした氣分で子に對する愛などは深く考ゆる遑がなかつた。それでも五つ年下の妻のおちかは總てを諦め、滿足したらしく、放縱な夫や、こどもの面倒を忌やな顔もしずに、素直に働いてゐた。だがおちかは小夜子以來自分の身嗜みなどには一切顧みなかつた。信一にはその地味な婆々むさい有樣が飽き足らなかつた。信一は斯うして何か分らなく焦々と物に憧憬れて、妻や子に甘い言葉もかけずに、夢のやうに一年をすごした。その内におちかの腹には二度目のが宿つてゐた。信一は二度

目に姙んで、小夜子がむづがつたり、膓を惡くしたりするやうになつてから、何程か面倒を見るやうになつた。然しこの小さい娘がお姉樣になることはそんな親といふ關係でなく、別な廣い意味に於ても可愛想であつた。信一はまだ子供などほしくなかつた。それだのに二人も出來た。隣りの木下君などは始終こどもをほしがつてゐるそれに出來ない、自然の攝理にも大なる矛盾があると思つた。『性慾の惡戯』こんなことも思はれた。そして小夜子がその犧牲者であるかのやうに思はれた。西も東も知らない頑是ない子にかなしみを與へる自分は勿論惡いが、如何とも抑制することの出來ない本能をも咀ひたかつた。

信一はいろ〳〵と思ひに耽りながら靜かに小夜子の頭を撫でてやつた。

小夜子は木下さんに丸めて貰つた座布團を抱いて赤ちやん可愛可愛をしてゐた。信一にはそれが涙ぐましく思はれた。そこへ奥さんがあたふた駈け込んで來た。

『まあお喜びなさい、輕いお產でね、あまけに綺麗な坊ちやんですよ』

信一は何れ出來れば男の子が好いと思つてゐたのでほつと安心した。奥さんは吉報を大聲に言つたまゝ押入から襤褸をだして又駈て行つた。

信一は木下さんが手紙を書き終るのを待つて小夜子を預けて一先づ家に歸つた。おちかは枕屏風を立てゝ、その中に蒲團に顔を埋めてゐた。いま世に出たばかりの名もない無籍の人間の肉塊はまつ赤な顔をして、きいきいないてゐた。産婦の惡臭と消毒の藥の臭ひが、ごつちやになつて鼻を襲つた。産婆の吉武さんは突立つて呆然としてゐる信一の顔を見ると言つた。

『島崎さん、お驕りなさい、虎年の男さんで、屹度出世なさいますよ』

信一は苦笑した。そしてこの淫らな、痛ましい光景には息が詰まるやうな感じがした。

『あゝ、俺はこれで二人の人の親となつたのか』

それから間もなくして近所の細君達は、何處で聞いたのか入れ替り〳〵見舞に來た。そして赤ん坊を賞めたり産婦を慰めたりして終には形のやうに『御用が御座いましたら何時でも抑せ付け下さい』と薄つぺらな御世辭をのこして行つた。

大魔時が來た。お産婆さんは明日を約して歸つた、隣りの奥さんは信一の家の汚れ物や御飯の仕末をしてから家に引き取つた。他人が集つて、ごちやごちや賑やかであつたのが急に寂然とすると、信一の氣も緩るんで、妙に心が沈んで來た。何とも知れない不安と止め度もない思ひとが、夕闇と共に潮のやうに、犇々と信一の身に浸み入つて來た。信一は出産と云ふ芽出度さを忘れて、丁度御通夜をしてゐるかのやうに、悄然と妻の枕もとに坐つてゐた。が思ひ出したやうにつと立つて臺所から洋燈を持ち出して、おちかの寢てゐる四疊半と座敷との間に吊した。そしてそれに火を入れた。隣りでは、小夜子が頻りにないてゐるらしく母を尋ねるやうな、哀れぽいなき聲が壁にとぎれとぎれに聞こえて來た。その絹糸を引くやうな細長いなき聲は悄れた信一の胸に深く〻〻刻み込まれた。そして信一自身も今は全くなき出したかつた。

おちかは産後の疲勞にすや〳〵寐てゐたが、洋燈の金具の音に吃驚して眼を醒した。
『あなた、小夜子ちやん見て來なくて好いんですか、何だかないてるぢやありませんか』
『うゝん、そうだね』
信一は胸一ぱいにかなしい思ひを抱いてゐたので、生返事のまゝ隣りへ立つた。
『や、奥さんどうもけふはとんだ御世話をかけましたね』
『何、あなた何の役にもたゝなかつたのですけれど、でもあんなお樂なお産ですと結構でございますわ、ほんとにお産婆さんが間に合はなんだくらひですものね』
『ほんとに御世話をかけました。さ、小夜子ちやん、お父さんが來たよ。なせないたのかい、叔母さんにおんぶされて、そんなになくんぢやありません。山下屋へ行つてカンカンボッポを買つてあげやうね』
『まだ小夜子ちやんが小さいので、お可愛想ですわね、日暮は淋しいと見えまして

ね――。でもこの嬢さんは、何でも分つて居らつしやいますわ、ほんとにお悧恰ですわ、矢張り早く姉さんになられるので何處らか違ひますわね』
『えゝ、お姉さんがまだねんねでね困ります。時に木下さんは？』
『鳥渡役所まで參りました。何だか體がすこし惡いと云ふてゐましたので、大方四五日休むのでございませう』
『そうですか、そりやいけませんね。私も十日ばかり休みたいと思つてゐます、何しろこの子の守ばかりでも大變ですからね。其の内に××の方から娘が來る筈になつてゐます』
『あのお娘さんだと何でもお出來になりますから好うございますわね、だけどそれまで、小夜子さんは家でお預りを致しませう。仕合せに、うちでも休みますし、却つてにぎやかで好うございますわ』
『そうでございますね、それだつたら好都合でございます、勝手ですけれど』

『えゝ好うございますとも、小夜子さんも皆に狎れておいでゝすから、大丈夫でございませう』

信一がこんな話を木下の細君としてゐる内に、菓子をかぢつてゐた小夜子は、あどけない寝顔を見せて、ぐつたり膝の上に眠つてしまつた。

『おねんねですね』

『罪がないもんですね、眠つてしまいました』

『こゝへ床敷いてあげませう』

『ぢや、暫らく御厄介でも御預りを願ひます』

『まあ、重たいこと、この頃まるまるとお肥りになりましたね』

『えゝ、夏の頃よりはよほど肥えたようです』

『さ、こうして置けば大丈夫でせう、よくぬけでなさいますからね』

『ほんとに寝癖が悪くて困ります。これですこしは嫉妬で痩せることでせう』

『そうですわね、まだこちらがお乳のうまい盛りですからね。赤ちやんのお乳あがるところなんか暫らく見せない方が好いでせうよ』

『……』

信一は妻のことも出來た赤子のことも忘れて茫然と思ひに耽つた。今迄に閑却せられてゐたこどもに對する愛が、始めて甦つて來たように思つた。信一はしみじみと我が子といふ意識を持つて、幼子の寝顔を覗き見た後で、こどものことをくれぐれも頼んで家に歸つた。おちかはまだ寐て居たが、信一が歸つた物音に眼を醒ました。

『小夜子はどうしてゐましたの？』

『うむ、何、日ぐれには何處の子でも泣くものだよ、いまお隣りで好く寝てるよ』

『そうですか、ぢやあなたもお疲れでしたでせう、早くお休みなさいまし』

信一はまだ寝たくもなかつたけれど、夜具を出してもぐりこんで、強いて眠りにつかうとして見たが、頭は却て冴へて來た。枕もとの時計は丁度九時を示してゐた。信一

は夜具の中へ這入ると又小夜子のことが氣になつた。おとなしく眠つてゐるのだらうか、それが氣になつた。も一遍顔をださずに、窓から覗いて見やうと起きあがつた。隣りでは既にカーテンを降ろしてあつたがカーテンの隙からよく内の樣子は知れた。小夜子はいつしか眼を醒ましてゐた。そして木下さんや、奥さんや、一郎君にあやされて無心に遊んでゐた。そして自分にも何やら片言を言つて皆を笑はつてゐた。信一には、あゝして無心に遊んでゐるが、外にゐて聲をかけてやりたいほど、可愛くいぢらしく思はれた。信一は安心してそのまゝ足を偷んで家に歸つた。そして再び床に這入つたが、こんどは無事に眠りつくか、それが見極めたかつた。信一は戀人を思つて思ひ焦れた末に、情人の家を徨ふ人のやうに、再たびそつと木下の窓下に忍び寄つた『子を思ふ親心』といふロマンチックな言葉が痛切に感じられた。小夜子はまだ寢てゐなかつた。そして皆が、寢た眞似をすれば、小夜子も寢た眞似をした。皆はよほど持て餘してゐるらしかつた。小夜子の蒲團には眞ん中に赤い小さい枕が轉がつてゐた。

この寐た眞似は皆を笑はした。信一も窓外で思はず笑つた。そしてそのおかしい中に又哀れを感じた。一そ連れ歸らうかとも思つた。信一が三たび窓外に佇んだ時は、無邪氣な寐顔と小さい片手とが蒲團の外に出てゐた。信一はやつと安心することが出來た。そしてその身も晝の疲勞に追はれて、とろとろとなつた。

夜は更けてゐた。信一の尖つた神經は妻の低い呼び聲にも容易に眼が醒めた。

『あなた、あなた』

『おい、いまごろ何だよ』

『小夜子さんね、わたしの枕下で、立ちながら、しくしく泣いてゐるぢやありませんか、抱いて寐かしつけてやつてさ下いまし』

『どれ、どこに小夜子がゐるんだい』

『それ、そこに、眼をこすつて泣いてるぢやありませんか』

『お前は何をいつてるのだよ、小夜子はお隣りでおとなしく寐てゐるよ』

『でも確かにそこに、あゝ、夢だつたのでせうか』

『それはお前が、あまり小夜子のことを心配して寐たからだ。小夜子は隣りでよく眠つてゐるから、お前も心配しないで靜かに、おやすみ。產後あまり氣を使ふとヒステリーになるからね』

信一は其の後を續けることが出來なかつた。そして蒲團を頭から引つ被つた。熱い涙が止め度もなく流れ出た。敷布が濡れてゆくのが信一にも知れた。

『あゝ、どうして俺は這麼に氣が弱いのだらうそれは矜とした若い血潮が流れ去るからだ。そして丁度妻のおちかが二人のこどもから乳を絞られて衰へてゆくやうに俺は妻と子から若い又と得難い油を絞らるゝのだ。俺は俺自身今迄の全生活を過つてゐたのだ。俺はこの若さで二人の親となつて、戀といふ戀も知らずに、埋まつてしまふのだ。長い生涯に於て華やかな一篇のエピソードもなしに』

信一は嗚咽しながら靜かに眼を瞑つた。（完）　——大正四、二、一七——

工夫の子

何か、お秀姉やのことで、家の中にごたゴたが起つたらしく、お母はお晝前から怒つて、何處かへ行つてしまつた。お父さあは正體もなく醉ばらつて寢てゐるし、それに第一に好きなお秀姉やも居なくなつたので、既う、家の中はまつ暗だのに、明りをつけやうにも手が届かないので、十一になる留吉は、裏木戸の柱に脊を凭せて、眼に一ぱいの涙を溜めて、いま他の人から優しい言葉の一こと掛けられたら、わつと大聲に泣きだしさうな顏をして、暮れ行く大空を靜止と凝視めてゐた。眞紅な大きな大陽が山の裾にかくれてから、紅に、紫に、灰色に、刻々と變りゆく夕空の色を眺めてゐると、何物とも知れない魔物が、遠い遠い他界の無人境へ、自分ひとりをおいてきぼりを喰はしたやうな、神秘的な哀愁が、留吉の心の全部を領した。